

東九州自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— 21 —

福岡県豊前市所在遺跡の調査

鳥越下屋敷遺跡

大村湯福遺跡

鬼木鉢立遺跡

2015

九州歴史資料館

序

福岡県では、平成 19 年度から西日本高速道路株式会社の委託を受けて、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。本報告書は平成 24 年度に行った、豊前市鳥越・大村・鬼木に所在する鳥越下屋敷遺跡・大村湯福遺跡・鬼木鉢立遺跡の発掘調査の記録です。

これらの 3 遺跡の調査では、弥生時代から江戸時代までの集落跡を発見しました。それぞれの遺跡の近隣では現在も集落が営まれておらず、現代にまで受け継がれた住み良い土地柄と言えます。そういう意味で、今回の調査によって得られた資料は地域の歴史を考える上で貴重なものでしょう。

本書が教育、研究とともに、文化財愛護思想の普及の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書作成に至る間には、西日本高速道路株式会社および関係諸機関ならびに、地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに深く感謝いたします。

平成 27 年 3 月 31 日

九州歴史資料館

館長 杉光 誠

例　言

1. 本書は、東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した福岡県豊前市に所在する鳥越下屋敷遺跡・大村湯福遺跡及び鬼木鉢立遺跡の記録である。東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第21集にある。
2. 発掘調査は西日本高速道路株式会社の委託を受けて九州歴史資料館が実施し、整理報告も同社の委託を受けて九州歴史資料館が実施した。
3. 鳥越下屋敷遺跡は東九州自動車道中津工事事務所管内の第19地点に、大村湯福遺跡は同第20地点に、鬼木鉢立遺跡は同32地点にある。
4. 本書に掲載した遺構写真の撮影は吉村靖徳・小川泰樹・岡田諭・吉山弥生が、遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は東亜航空技研株式会社に委託した。
5. 本書に掲載した遺構図の作成は、吉村・小川・岡田・大里が行い、発掘作業員が補助した。
6. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、小川の指導の下に実施した。
7. 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
8. 本書に使用した分布図は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000地形図「中津」を変更したものである。本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。
9. 本書のⅢは吉村が、VIは岡田が執筆した。その他の執筆・編集は小川が行った。

目次

	頁
Iはじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の組織	4
II位置と環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	5
III鳥越下屋敷遺跡	8
1 調査の経過	8
2 調査の概要	8
3 遺構と遺物	10
土坑	10
4 まとめ	13
IV大村湯福遺跡	14
1 調査の経過	14
2 調査の概要	14
3 遺構と遺物	15
土坑	15
溝	17
4 まとめ	23
V鬼木鉢立遺跡2次調査	24
1 調査の経過	24
2 調査の概要	24
3 遺構と遺物	25
土坑	25
溝	28
その他出土の遺物	28
4 まとめ	28
VI鬼木鉢立遺跡3次調査	29
1 調査の経過	29
2 調査の概要	29
概要	29
トレンチ	32
3 遺構と遺物	36
堅穴住居跡・土器棺墓	36
掘立柱建物跡	44

土坑墓・土坑・溝	46
その他の遺構出土土器・遺構外出土土器（第36図）	50
4まとめ	52

図版目次

図版 1	1. 鳥越下屋敷遺跡遠景（空中写真、南から） 2. 鳥越下屋敷遺跡全景（空中写真、西から）	
図版 2	1. 1～3号土坑（北から） 3. 1号土坑土層（東から）	2. 1号土坑（東から）
図版 3	1. 3号土坑（東から） 3. 1～4号溝（北から）	2. 4号土坑（東から）
図版 4	鳥越下屋敷遺跡出土遺物	
図版 5	1. 大村湯福遺跡遠景（空中写真、北から）	2. 大村湯福遺跡遠景（空中写真、南から）
図版 6	1. 西半部全景（空中写真、東から） 3. 東半部全景（空中写真、東から）	2. 西半部全景（空中写真）
図版 7	1. 東半部全景（空中写真） 3. 1号土坑（掘削状況、東から）	2. 1号土坑（検出状況、東から）
図版 8	1. 2号土坑（検出状況、南から） 3. 3号土坑（南から）	2. 2号土坑（掘削状況、西から）
図版 9	1. 1～3号溝（空中写真） 3. 3号溝（東から）	2. 1号溝（南から）
図版 10	大村湯福遺跡出土遺物①	
図版 11	大村湯福遺跡出土遺物②	
図版 12	大村湯福遺跡出土遺物③	
図版 13	1. 鬼木鉾立遺跡2次調査区遠景（空中写真、北東から） 2. 鬼木鉾立遺跡2次調査区全景（空中写真）	
図版 14	1. 1号土坑（北東から） 3. 3号土坑（北西から）	2. 2号土坑（南西から）
図版 15	1. 4号土坑（北西から） 3. 6・7号土坑（東から）	2. 5号土坑（西から）
図版 16	1. 1号溝（東から） 3. 鬼木鉾立遺跡2次調査出土遺物	2. 1号溝（東から）
図版 17	1. 鬼木鉾立遺跡3調査区西半部全景（右下が北） 2. 鬼木鉾立遺跡3調査区東半部南側全景（左上が北） 3. 鬼木鉾立遺跡3調査区遠景（東から）	
図版 18	1. 鬼木鉾立遺跡3調査区遠景（東から）	2. 1号トレンチ土層断面（北から）

	3. 2号トレンチ土層断面（北東から）	
図版 19	1. 3号トレンチ土層断面（南から）	2. 1号竪穴住居跡南北土層断面南側（東から）
	3. 1号竪穴住居跡完掘状況（西から）	
図版 20	1. 2号竪穴住居跡土層断面（南から）	2. 2号竪穴住居跡検出状況（北西から）
	3. 1号土器棺墓（西から）	
図版 21	1. 2号竪穴住居跡と1号土器棺墓（西から）	2. 1号掘立柱建物跡（東から）
	3. 2号掘立柱建物跡（南から）	
図版 22	1. 3号掘立柱建物跡（西から）	2. 4号掘立柱建物跡（上が北西）
	3. 1号土坑墓土層断面（南から）	
図版 23	1. 1号土坑墓遺物出土状況（北から）	2. 1号土坑土層断面（南から）
	3. 1号土坑完掘状況（南から）	
図版 24	1. 2号土坑検出状況（南から）	2. 2号土坑・1号溝土層断面（南から）
	3. 調査区周辺地形（北東から）	
図版 25	鬼木鉢立遺跡3次調査出土土器①	
図版 26	鬼木鉢立遺跡3次調査出土土器②	

挿図目次

	頁	
第1図	福岡県豊前市の位置	1
第2図	東九州自動車道路線および調査地点位置 (1/200,000)	3
第3図	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	6
第4図	鳥越下屋敷遺跡位置図 (1/1,000)	8
第5図	鳥越下屋敷遺跡遺構配置図 (1/200)	9
第6図	1～4号土坑実測図 (1/40)	11
第7図	1～4号溝土層図 (1/40)	12
第8図	鳥越下屋敷遺跡出土遺物実測図 (1/3、1/2、2/3)	12
第9図	大村湯福遺跡位置図 (1/1,000)	14
第10図	大村湯福遺跡遺構配置図 (1/300)	15
第11図	1～3号土坑実測図 (1/30)	16
第12図	1号土坑出土遺物実測図 (1・2:1/3、3～8:1/4)	16
第13図	1～3号溝実測図 (1/120、1/60)	18
第14図	1・2号溝出土遺物実測図 (1・4～19:1/3、2・3・20～26:1/4)	19
第15図	2号溝出土遺物実測図 (27:1/6、28～30:1/4、31・32:1/3)	20
第16図	3号溝出土遺物実測図① (1～16:1/3、17～29:1/4)	22
第17図	3号溝出土遺物実測図② (1/3)	23
第18図	鬼木鉢立遺跡2次調査位置図 (1/3,000)	24
第19図	鬼木鉢立遺跡2次調査遺構配置図 (1/300)	25

第20図	1～7号土坑実測図（1/40・1/60）	26
第21図	1号溝実測図（1/40）	27
第22図	鬼木鉢立遺跡2次調査出土遺物実測図（1/3）	28
第23図	鬼木鉢立遺跡調査区位置図（1/3,000、1/1,000）	30
第24図	鬼木鉢立遺跡3次調査遺構配置図（1/300）	31
第25図	1～3号トレンチ土層断面実測図（1/80）	33
第26図	1～3号トレンチ出土土器実測図（1/3）	35
第27図	1号竪穴住居跡実測図（1/60、1/30）	37
第28図	1号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）	39
第29図	1号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）	40
第30図	2号竪穴住居跡・1号土器棺墓実測図（1/60、1/30）	41
第31図	2号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）	43
第32図	2号竪穴住居跡出土土器実測図②・1号土器棺出土土器実測図（1/3）	45
第33図	1・2号掘立柱建物跡実測図（1/80）	46
第34図	3・4号掘立柱建物跡実測図（1/80）	47
第35図	1号土坑墓、1・2号土坑、1号溝実測図（1/40、1/80）	49
第36図	3号掘立柱建物跡、1号土坑墓、1・2号土坑、その他の遺構、遺構外出土土器、瓦（1/3）・石器実測図（1/2）	51

表目次

第1表	東九州自動車道関係発掘調査地点一覧	2
第2表	1号トレンチ土層断面注記一覧	32
第3表	2号トレンチ土層断面注記一覧	34
第4表	3号トレンチ土層断面注記一覧	34
第5表	1号竪穴住居跡土層断面注記一覧	36
第6表	2号竪穴住居跡土層断面注記一覧	40

I はじめに

1. 調査に至る経緯

東九州自動車道は、北九州市を起点として、福岡、大分、宮崎、鹿児島各県の東九州に点在する主要都市を結んで、鹿児島市に至る延長約436kmの高速道路である。既に高速道路整備が完了している西九州側と比較して、これまでの物流・移動時間の面での較差が、東九州自動車道が開通することによって解消し、東九州地域の経済、産業、医療、文化等の各方面での振興が見込まれている。また、九州道、大分道、宮崎道と接続することで、九州内の移動時間が大幅に短縮され、地域間交流が活発になるとともに、九州全体の発展も期待されている。

東九州自動車道の建設事業は、日本道路公団が平成19(2007)年10月に民営化して誕生した西日本高速道路株式会社(NEXCO西日本)



第1図 福岡県豊前市の位置

九州支社の福岡工事事務所、中津工事事務所、延岡高速道路事務所が引き続いだ担当し、平成25年度までに約277kmが部分的に開通している。福岡県内では、北九州JCT - 割田北九州IC間が平成18年2月、割田北九州空港 - 行橋ICが平成26年3月、行橋IC - みやこ豊津ICが平成26年12月にそれぞれ開通しており、これで福岡工事事務所が担当してきた区間は全て供用されたこととなった。一方の中津工事事務所が担当している椎田南ICから県境までの区間については平成28年度末までに供用開始予定である。

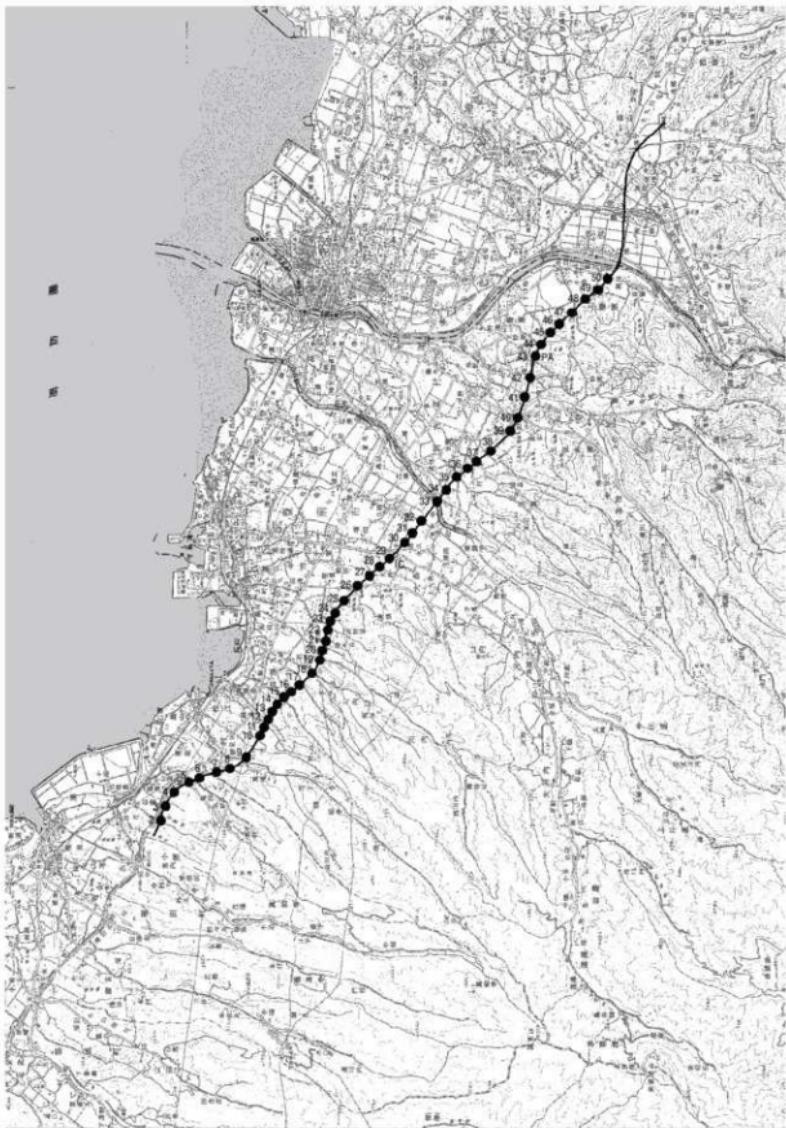
埋蔵文化財の調査については、平成9年3月に福岡県教育委員会に対して出された「東九州自動車道計画ルートに係る埋蔵文化財について」の照会文書(刈田 - 豊津間)を受けて、58箇所の調査地点を回答したことに始まる。平成12年以降は、用地の取得状況に合わせて試掘・確認調査を実施し、埋蔵文化財の存在が確認された箇所について順次発掘調査を実施しており、詳細は第1表に示したとおりである。

今回報告する、鳥越下屋敷遺跡、大村湯福遺跡、鬼木鉢立遺跡については福岡県教育委員会および豊前市教育委員会がこれまで行なってきた分布調査では埋蔵文化財包蔵地として未確認であったが、西日本高速道路株式会社中津工事事務所からの依頼を受け平成23年10月18・19日および平成24年3月6・7日に実施した試掘調査によって発掘調査の必要な範囲を確定した。

発掘調査は、用地の取得状況ならびに建設工事の工程に合わせて、鳥越下屋敷遺跡は平成24年7月4日～8月28日、大村湯福遺跡は8月16日～11月20日、鬼木鉢立遺跡は4月26日～平成25年2月8日までの期間、それぞれ実施した。

第1表 東九州自動車道関係発掘調査地点一覧

地点	工事件名	道路名	所在地	対象面積 (m ²)	試掘年度	調査面積 (m ²)	調査年度	報告年度	既刊報告 書番号	備考
2	中津	石堂大石ヶ丸遺跡	築上郡築上町石堂	9027	H21~23	200	H23	H25	15集	
3	中津	福岡業切古墳群	築上郡築上町石堂	16644	H21~23	1000	H22	H25	15集	
4	中津	頭無古墳群 西一町田遺跡	築上郡築上町上ノ河内	19420	H22					遺跡なし
5	中津		築上郡築上町上ノ河内	2840	H21					遺跡なし
6	中津	中村西峰尾遺跡	築上郡築上町上ノ河内 豊前市中村	26972	H22	15000	H23~24	H25	15集	
7	中津	中村山梯遺跡	豊前市中村	16579	H21~22	700	H22	H25	15集	
8	中津		豊前市中村・馬場	10354	H21					遺跡なし
9	中津		豊前市中村・松江	42434	H24					
10	中津		豊前市松江	9905	H23					遺跡なし
11	中津		豊前市松江	26570	H21~23					遺跡なし
12	中津	松江黒部遺跡	豊前市松江・四郎丸	14462	H21	600	H23	H25	15集	
13	中津		豊前市四郎丸	12986	H21~23					遺跡なし
14	中津		豊前市四郎丸	2390	H21					遺跡なし
15	中津		豊前市四郎丸	9735	H22					遺跡なし
16	中津		豊前市四郎丸	10432	H22					遺跡なし
17	中津	川内下野添遺跡	豊前市川内	15972	H21~23	3600	H22~23	H25	15集	
18	中津		豊前市川内	16040	H21~23					遺跡なし
19	中津	鳥越下屋敷遺跡	豊前市鳥越	4963	H23~24	760	H24	H26	21集(本冊)	
20	中津	大村湯福遺跡	豊前市大村	8762	H23~24	1100	H24	H26	21集(本冊)	
21	中津		豊前市大村	0						
22	中津		豊前市大村	0						
23	中津		豊前市大村	0						
24	中津	天地山遺跡	豊前市大村	6777	H20~22					遺跡なし
25	中津	大村上野遺跡 大村シトト牛田遺跡	豊前市大村・荒城	10527	H20~22~23	2600	H23	H25	15集	一部豊前市により調査
26	中津	荒城山田原遺跡	豊前市荒城	21821	H21~24	1000	H22	H25	15集	
27	中津		豊前市荒城	9823	H21~22					遺跡なし
28	中津		豊前市大西	23122	H21~23					遺跡なし
29	中津	塔田琵琶田遺跡 大西遺跡 西ノ原遺跡 時木遺跡	豊前市大西・永久 塔田・久路上	63733	H21~24	35000	H23~25	H26	22集	一部豊前市により調査
30	中津	久路上人馬道遺跡	豊前市久路上	9463	H23					遺跡なし
31	中津	鬼本溝添遺跡	豊前市鬼本	12636	H23					遺跡なし
32	中津	鬼本跡立遺跡	豊前市鬼本	25256	H21~23	5500	H24	H26	21集(本冊)	
33	中津	諸方古墳群 七ヶ枝遺跡 春星敷道遺跡 道ノ本遺跡	築上郡上毛町諸方	12456	H20~23	3500	H20~22	H24	8集	上毛町試掘
34	中津	龍毛遺跡	築上郡上毛町諸方	11732	H20~21~23~24	5000	H21~24	H24	8集	上毛町試掘
35	中津	下尻高遺跡 ハカノ本道跡	築上郡上毛町諸方・尻高	11517	H20~21	7200	H20~21	H24	7集	
36	中津	安曇山田遺跡	築上郡上毛町安曇	10135	H20	9400	H20			一部上毛町により調査
37	中津	安曇山田遺跡	築上郡上毛町安曇・宇野	24970	H20~21		H20~21	H24	7集	*
38	中津		築上郡上毛町佐井	22252	H20					遺跡なし
39	中津	土佐井遺跡2C-4区	築上郡上毛町土佐井	21860	H20~22	4400	H22~23	H25	16集	一部上毛町により調査
40	中津	土佐井遺跡2A-2区	築上郡上毛町土佐井	13476	H20~22	600	H23	H25	16集	*
41	中津	土佐井小辺遺跡 唐原山城跡	築上郡上毛町土佐井	7887	H21~22~24	1500	H22~24	H25	16集	
42	中津	ガサメ牛遺跡 穴ヶ梨山南道遺跡	築上郡上毛町下唐原	33002	H21~22~24	4000	H22~24	H25 H26	16集 23集	一部上毛町により調査
43	中津		築上郡上毛町下唐原	25215	H21~22~23					遺跡なし
44	中津	大久保柄田遺跡 (新池南古墳)	築上郡上毛町下唐原	13452	H22	7500	H22	H25	16集	一部上毛町により調査
45	中津		築上郡上毛町下唐原	11997	H24					遺跡なし
46	中津	祖山古墳群	築上郡上毛町下唐原・上唐原	23977	H22~24	12000	H23~24	H26	23集	
47	中津	四ヶ塚山古墳群	築上郡上毛町唐原	7193	H22~23	6600	H23			
48	中津	継追古墳群	築上郡上毛町唐原	4577	H25	2000	H25			
49	中津	桜町遺跡	築上郡上毛町唐原	14250	H24	8940	H24~25			
50	中津	桜町遺跡	築上郡上毛町唐原	4735	H23	1050	H24~25			一部上毛町により調査



第2図 東九州自動車道路線および調査地点位置 (1/200,000)

2. 調査の組織

発掘調査（平成 24 年度）および整理・報告書作成（平成 26 年度）の関係者は次のとおり。

	平成 24 年度	平成 26 年度
西日本高速道路株式会社九州支社		
支社長	本間清輔	本間清輔
西日本高速道路株式会社九州支社中津工事事務所		
所長	三瀬博敬	宗方鉄生
副所長（技術担当）	小島二郎	小島二郎
副所長（事務担当）	中村重俊	中村重俊
総務課長	宇都良典	門田憲明（～9.30） 内田伸博（10.1～）
用地課長		和田 勝
用地第一課長	藤江 正	
工務課長	渡辺浩延	本田正和
豊前工事長	川畠一弘	川畠一弘
上毛工事長	荒平裕次	大岡慶巳
九州歴史資料館		
総括		
館長	西谷 正	杉光 誠
副館長	篠田隆行	伊崎俊秋
総務室長	圓城寺紀子	塙塚孝憲
文化財調査室長	飛野博文	飛野博文
文化財調査室長補佐	吉村靖徳	吉村靖徳
文化財調査班長	小川泰樹	秦 憲二
庶務		
経務班長	長野良博	山崎 彰
事務主査	青木三保	南里成子 宮崎奈巳
主任主事	近藤一崇	
主事	谷川賢治	秦 健太
調査・報告・整理		
企画主幹	吉村靖徳	吉村靖徳
技術主査	小川泰樹	小川泰樹
主任技師	岡田 諭	岡田 諭
臨時調査員	吉山弥生	

II 位置と環境

1. 地理的環境

豊前市は、福岡県東部に位置し、北は周防灘に面する。明治22（1889）年の町村制施行に際して、上毛郡の2町7村、築城郡の1村が発足し、明治29（1896）年に両郡が合併して築上郡に、昭和10（1935）年には八屋町と宇島町が合併して八屋町となり、昭和30（1955）年に1町8村（八屋町・山田村・千束村・三毛門村・黒土村・合河村・岩屋村・横武村・角田村）が合併して宇島市としたが、同年名称変更により豊前市となって今日に至っている。面積は111.17km²、人口は平成26年時点で約26,000人である。

市域南西には英彦山（1,199m）から派生した一ノ岳（1,124m）、犬ヶ岳（1,131m）、経読岳（992m）、雁巣山（807m）、また求菩提山（782m）、国見山（638m）と連なる山稜は分水嶺ともなり、それらに源を発する佐井川、岩岳川、中川やその支流などの大小の河川は、浸食によって北東に延びる多くの谷底平野をつくり、中流で大きく開けて豊前平野を形成して北面する周防灘へと注ぐ。鳥越下屋敷遺跡と大村湯福遺跡は国見山から北東に延びる丘陵の先端部付近の西麓と東麓に、鬼木鉢立遺跡は佐井川・岩岳川によって開析された扇状地上にそれぞれ立地する。

2. 歴史的環境

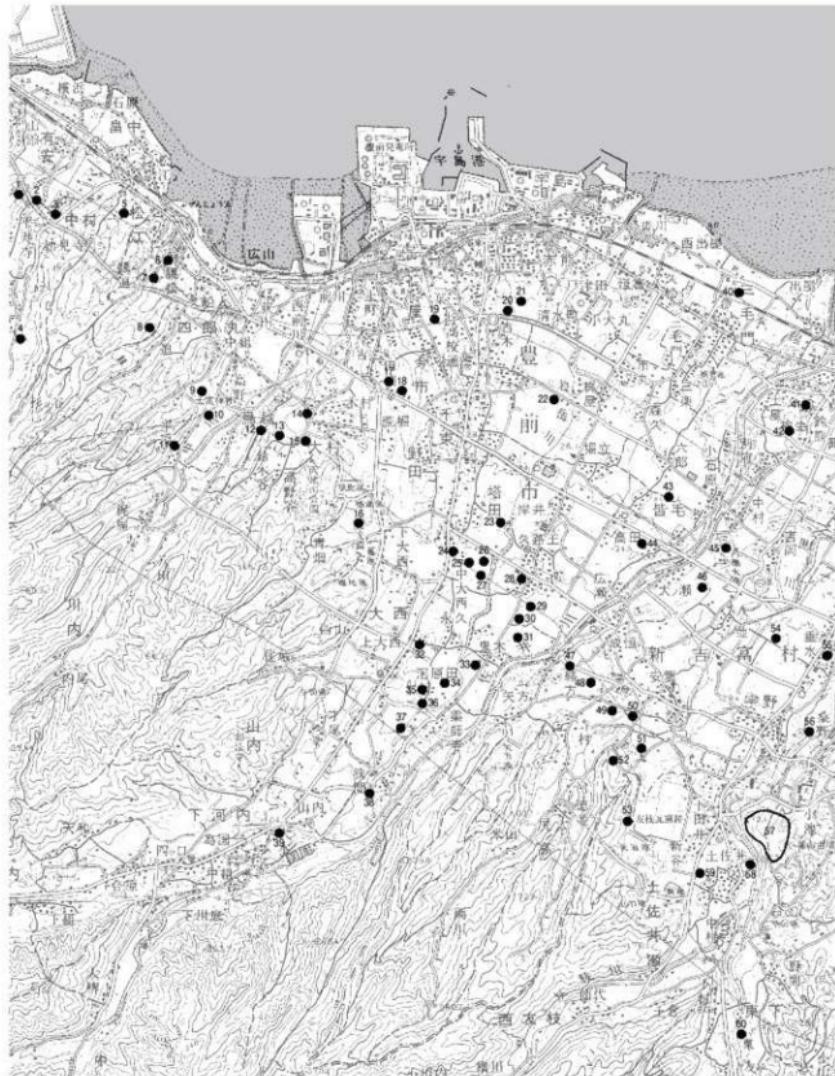
この地域の歴史研究、ことに考古学的調査は、これまで他地域の比較すると進展していなかつたが、1990年代以降の圃場整備事業や国道10号バイパス建設事業などの大規模発掘調査によって、徐々に明らかになりつつある。

豊前市域の旧石器時代についても同様で、この時代の資料の存在が知られるようになったのは青畑向原遺跡の調査で旧石器群が出土して以降で、その後荒堀大保遺跡、薬師寺塚原遺跡、小石原泉遺跡などからも相次いで旧石器が出土している。

縄文時代では、後期に遺構・遺物が集中してみられ、中村石丸遺跡、扶間宮ノ下遺跡、川内楠木遺跡、松江炭山遺跡等で集落跡が検出されているほか、小石原泉遺跡では堅果類が出土する低湿地型貯蔵穴群を調査している。その他の時期については、吉木遺跡などで早期の土器が比較的まとまって出土していて遺構が存在した可能性が指摘されているほか、久路上土植掛遺跡で検出した落し穴群等もこの時期のものである可能性があり、また河原田塔田遺跡で晩期の堅穴住居跡が1軒発見されているが、それ以外はいずれも遺物が散発的に出土する程度であり、調査が充分に進展している状況ではない。

この傾向は弥生時代に入ても継続し、現在のところ前期初頭に遡る資料は発見されておらず、前期中葉以降の久路上芝掛遺跡の集落跡のほか昭和町遺跡の壺棺が知られる。前期末から中期になると、佐井川、岩岳川の中流域に集中的に集落が展開し、ことに佐井川沿いの河原田塔田遺跡、鬼木四反田遺跡、鬼木鉢立遺跡では青銅器が出土しており（市指定考古資料）、それは豊前市域ではこの地区に限られている。また、後期になると、小石原泉遺跡など河川下流域へと展開している様子が覗える。

古墳時代では、隣接する山国川沿いに西方古墳、能満寺3号墳（ともに上毛町）、榆生山古墳（吉富町、町指定史跡）と、近年になって前方後円墳が相次いで確認されたのとは対照的に、豊前市



1 中村西峰尾遺跡	2 中村石丸遺跡	3 中村田後遺跡	4 馬場植田遺跡	5 松江栗山遺跡
6 黒部古墳群	7 黒峰尾古墳群	8 松江黒部遺跡	9 川内下野添遺跡	10 川内楠木遺跡
11 平原横穴墓群	12 鳥越下屋敷遺跡	13 大村湯福遺跡	14 大村天神林遺跡	15 大村石畠遺跡
16 青畑向原遺跡	17 芦屋大保遺跡	18 麗星南久保遺跡	19 今山町野道跡	20 吉木遺跡
21 吉木常末遺跡	22 吉木芦町遺跡	23 久路土芝掛遺跡	24 大西遺跡	25 西ノ原遺跡
26 塚田琵琶田遺跡	27 時木遺跡	28 久路十六田遺跡	29 久路土崎鉢田遺跡	30 久路土崎掛遺跡
31 鬼木斜立遺跡	32 水久遺跡	33 鬼木四反田遺跡	34 河原田寺田遺跡	35 河原田善丸遺跡
36 河原田四ノ坪遺跡	37 善師寺塚塚遺跡	38 犬間宮ノ下遺跡	39 下河内丸ノ本遺跡	40 三毛門故牛田遺跡
41 鶴熊山遺跡	42 麗方古墳群	43 小石原泉遺跡	44 肴毛高尾代遺跡	45 日照熊山塚群
46 大ノ瀬官街遺跡	47 麗方古墳群	48 麗毛遺跡	49 ハカノ本遺跡	50 山田空跡群
51 安雲山田遺跡	52 照日窯跡群	53 友枝瓦窯跡	54 渡ノ口遺跡	55 重水庵寺
56 宇野代遺跡	57 唐原山城跡	58 土佐井遺跡	59 土佐井ミソンド遺跡	60 東友枝曾根遺跡

第3図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

内では現在まで前・中期の古墳の存在は知られておらず、後期になって黒部古墳群（県指定史跡、考古資料）、黒峰尾古墳群（市指定史跡）、横穴墓として平原横穴墓群（市指定史跡）が現存する程度である。集落跡としては、小石原泉遺跡で弥生時代から古墳時代後期まで継続する集落跡を検出しており、中後期のカマドに付設するオンドル状遺構の比率が高いことが特徴的である。同様に古墳時代の大規模集落として塔田堀畠遺跡が最近の調査で明らかになりつつあるが、やはりオンドル状遺構を持つものが多い。

古代では、正倉院文書中の大宝2（702）年の戸籍帳にある上三毛郡加目久也里は『和名類聚鈔』によれば上毛郡炊江郷とされ、八屋、荒堀、大村付近に比定されている。この地の荒堀大保遺跡、荒堀雨久保遺跡、大村石畑遺跡などから奈良時代の遺物が出土しているほか、官道推定線沿いとその周囲の荒堀大保遺跡、皆毛高野台遺跡、小石原泉遺跡等で道路状遺構が確認されている。また、官道に沿う佐井川右岸には大ノ瀬官衙遺跡（上毛町、国指定史跡）があり、上毛郡衙と推定されている。

求菩提山（国指定史跡）は古代以来の山岳靈場遺跡である。12世紀中頃に賴貳によって再興され、この時期の遺物として銅板法華經・銅鎧（国宝）、経塚出土品（重要文化財）等の遺物が知られるほか、市内でも同時期の遺跡が多いのは必ずしも偶然ではなかろう。求菩提山はもと彦山六峰にも数えられたが、彦山の影響力が圧倒的な豊前にあって、ほぼ唯一の本山派修驗道の拠点として明治まで存続し、有形・無形の多数の文化財を今日にまで伝える（県指定有形民俗文化財、無形民俗文化財など）。

また、平安時代には宇佐八幡宮の発展と莊園領主化がみられ、豊前市域では角田荘、黒土荘、山田荘が知られるが、前者は宇佐八幡宮の、後二者は神宮寺の弥勒寺の莊園であった。

中世になると、平氏滅亡後に地頭として豊前に下向した下野出身の宇都宮氏が徐々に勢力を伸ばし、仲津郡、築城郡、上毛郡、下毛郡に次々と一族を配置していった。市内に残る山城跡のほとんども、宇都宮氏一族の築城によるものであるという。大村石畑遺跡、大村天神林遺跡、馬場植田遺跡等、城跡推定地とその周辺での発掘調査によって、居館跡や櫓列、堀跡等、これに関連する遺構・遺物が確認されている。

中世後半、この地は大内氏、大友氏の勢力争いの舞台となり、後に毛利氏、秋月氏も加わって、たびたび戦乱に巻き込まれている。最終的にそれらは秀吉の九州征伐によって一掃され、豊前国のうち京都郡、仲津郡、築城郡、上毛郡、下毛郡、宇佐郡を黒田孝高が知行することで決着した。

関ヶ原戦後、転封によって細川氏が入国し、のち寛永9（1632）年に小笠原氏が入封して幕末まで続いている。関門海峡を扼した九州の要衝地である豊前に諸代大名を配置したことで、徳川幕府の支配体制は確立したともいえる。

寛文11（1671）年、二代藩主忠雄の弟真方（長高）に築城郡内22か村一万石を分封して新田藩が創設された。これはのち貞享2（1685）年に豊前市域を含む上毛郡内の26か村（黒土手水・黒土、鬼木、下大西、塔田、野田、荒堀、今市、吉木、清水町、恒富、小犬丸、久松、三楽、岸井手水・安雲、緒方、成恒、広瀬、岸井、堀立、梶屋、市丸、森久、六郎、小石原、皆毛、高田）と交換されている。

III 烏越下屋敷遺跡

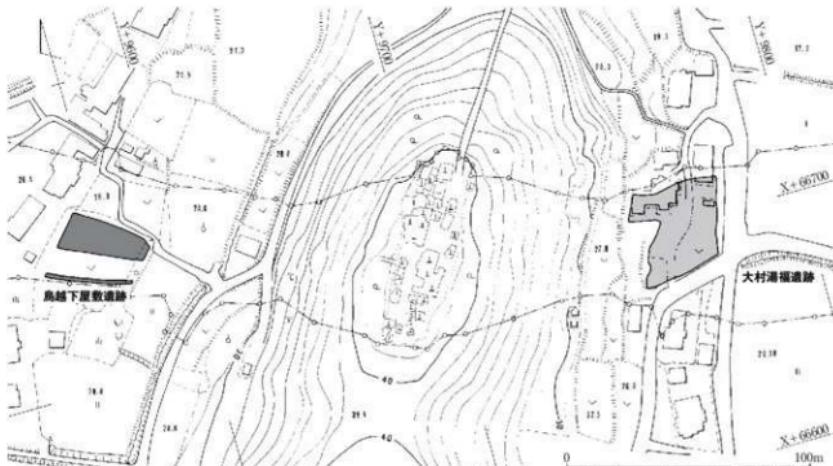
1 調査の経過

平成24年3月6日に西日本高速道路株式会社中津工事事務所からの依頼を受け、調査対象地の試掘調査を行った。その結果、遺構が存在する可能性が高かった台地の中央部において、遺構密度は低いものの遺跡の存在が確認された。その西側は削平を受け、また、東側は丘陵との間に小さな谷に向かって旧地形も傾斜しており、遺構は確認されなかった。調査着手時には、すでに対象地西側を北に流れる中川の橋脚をかける工事が進捗しており、9月からは当該地の工事に着手する予定が組まれていた。そのため、担当が進めていた上毛町龍毛遺跡第3次調査の完了を待たずして、調査に着手することになった。対象地に至るには工事側で施工する付け替え道路を横切る必要があったが、施工が梅雨時期の悪天候で遅延し、目途が立たない状況となっていた。

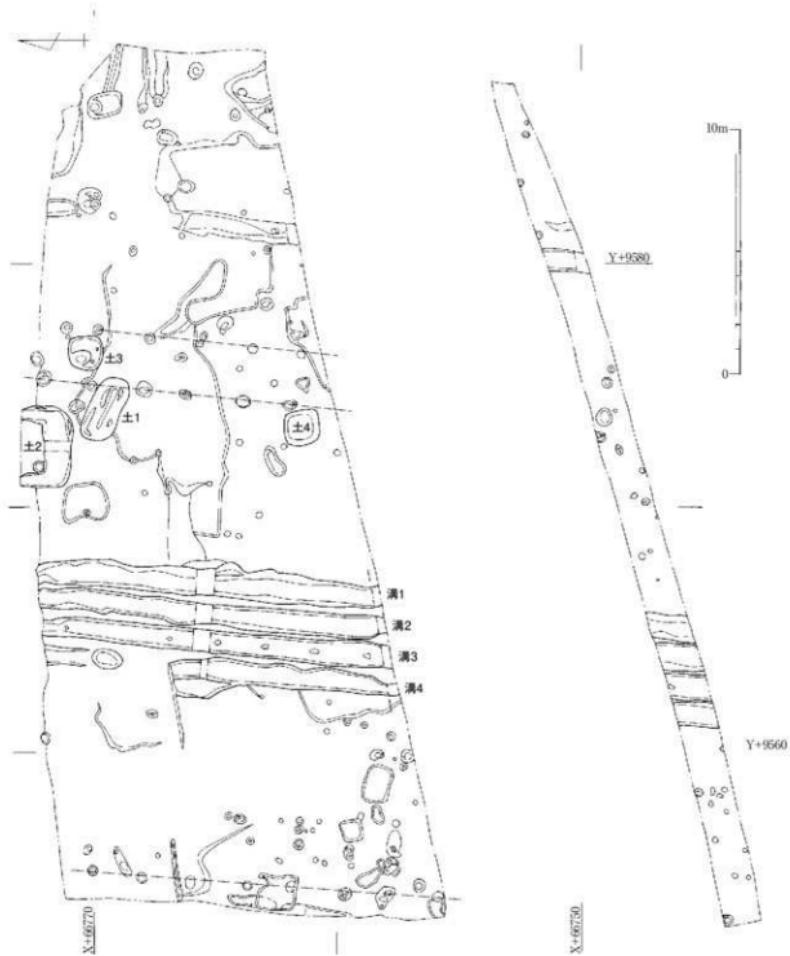
上記のように作業所や作業員駐車場を当面設置できない懸念もあったが、取り急ぎ7月4日から当該発掘調査対象地について重機による表土剥ぎを開始した。なお、調査を必要とする箇所のうち、南側の約10m幅の限定協議範囲を除いた暫定供用部分760m²と南側水路部分について発掘調査を実施した。7月10日には進入路の問題も解決したため12日に建機を搬入、翌13日に発掘機材搬入を行い、作業員の確保・手配が完了した7月20日から現地作業を開始した。その後、8月20日にラジコンヘリによる空中写真撮影を行い、8月23日までに実測作業を終えた。8月28日に建機を搬出し、調査を完了した。(埋蔵文化財発掘調査の報告：平成24年7月8日～24九歴第308号の13、埋蔵物の発見届：平成24年8月20日～24九歴160号の8)

2 調査の概要

調査地周辺は、標高1199mの英彦山から東に連なる山系のうち、国見山から派生する八つ手状



第4図 鳥越下屋敷遺跡遺構配置図(1/2,000)



第5図 烏越下屋敷遺跡遺構配置図 (1/200)

の小丘陵とそれら小丘陵で挟まれる谷によって形成される地形が速なる。遺跡は、その小丘陵の先端近く、北流する中川が形成する谷に面した台地上に立地する。隣接する丘陵頂部と調査地との標高差は13mほどある。

今回の調査において検出した遺構は、土坑4基、溝6条、ピット多数である。検出した遺構のうち、南北方向の溝5条と、同じく南北方向に筋を通すピットは、畑地の棚を支えるために掘られたものである。出土遺物には弥生時代の土器と鎌倉時代の瓦器があるが、いずれも小破片で、その他、石礫が出土した。

発掘区の基本的な層序は、暗灰色土（表土・約15cm）の下層に茶灰色粘質土（約5cm～30cm、西から東に向けて厚くなる）が堆積し、これを除去した黄褐色土層面が遺構検出面となる。なお、新期遺構は表土下から掘り込まれている。遺構検出面は南西側がもっとも高く標高27.5mを測り、北東方向に向かって緩く傾斜する。北東部での検出面の標高は26.5mである。

3 遺構と遺物

土坑

1号土坑（図版2、第6図）

発掘区の北東部で検出した。平面プランは長円形で、規模は長さ3.0m、幅1.35m、深さ1.1mを測る。4～9層は一気に埋め戻しおこなっており、その後に掘りなおしをしている（1～3層）。壁面には内側に傾斜するテラスがあるものの、規模や横断面の形状がV字状となることなどから、落とし穴として機能した可能性もある。ただ、1～3層がこの土坑の掘りなおしであるならば落とし穴とするには疑問も残る。

2号土坑（図版2、第6図）

1号土坑の北側で検出し、北側は後世の段造成によって削平されている。平面プランはコの字形を呈する。規模は東西長3.35m（下端幅は0.9m）、南北長2.2m、深さ0.5mを測る。北側に張り出した部分の幅は0.6～0.7m（下端幅は0.35～0.4m）を測る。底面は北側に向かってわずかに傾斜する。埋土は南壁際の5層とそれ以外の層が区別される。1～4層は掘りなおしと考えられる。

3号土坑（図版2・3、第6図）

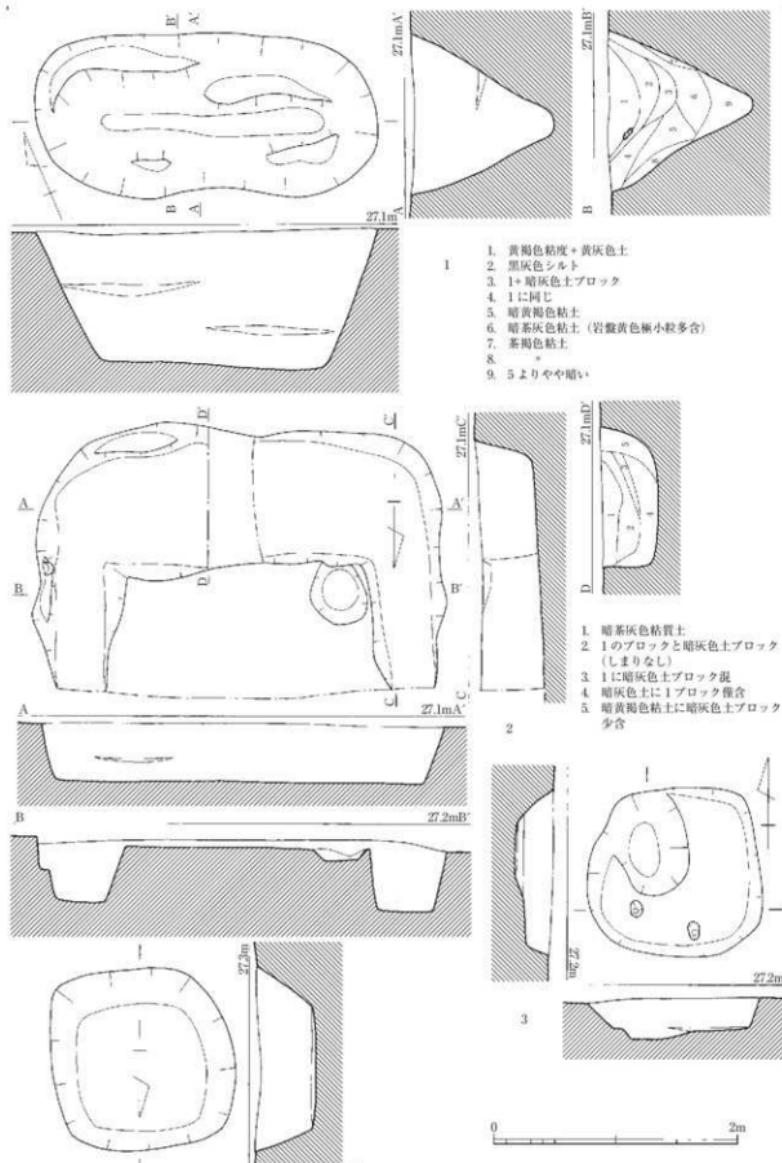
1号土坑の西で検出した。平面プランは隅丸方形を呈する。底面はフラットで北東側は長円形状に一段深くなる。規模は長さ・幅とも1.4mを測る。深さは0.3mを測る。埋土は暗灰色粘質土。

4号土坑（図版3、第6図）

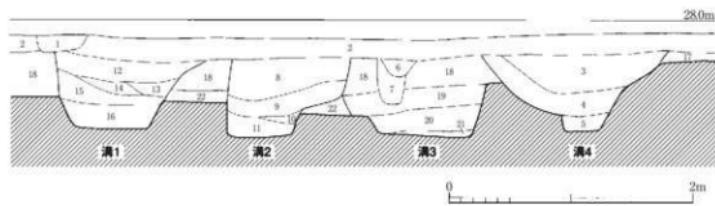
発掘区の中央南壁寄りで検出した。平面プランは隅丸長方形を呈する。底面はフラットである。規模は1.5m×1.5m、深さ0.45mを測る。

出土遺物（図版4、第8図）

1～3は弥生土器である。1は高杯。口縁端部を内側に屈曲させ、端部をまるく取める。2も高杯の脚部と考えられる。3は鉢の口縁部。端部を外方に屈曲させる。調整は内外面とも横方向



第6図 1~4号土坑実測図 (1/40)



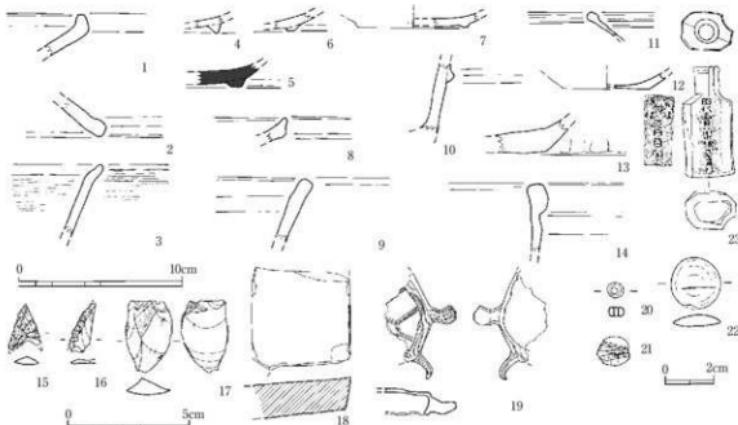
第7図 1~4号溝土層図(1/40)

1 黒灰色土(ピット)	6 1と同じ(利鉈を埋める)	11 3同じ	16 3同じ
2 喀灰土(表土)	7 1に暗茶褐色ブロック少含	12 3同じ	17 細色粘質土
3 喀灰褐色粘土と暗灰色土ブロック(前者多)	8 4同じ	13 9同じ	18 17同じ
4 " "(後者多)	9 暗灰色土	14 4同じ	19 3同じ
5 3同じ(しまりなし)	10 喀灰褐色粘土	15 9に暗茶褐色粘土ブロック少含	20 4同じ
			21 暗灰色粘土
			22 3同じ

のハケ。1・2は4号土坑、3は3号土坑から出土した。

4は土器師椀。断面三角形の高台を貼付する。調整は不明。5は須恵器の高台部分である。色調は灰白色を呈し、焼きがあまい。調整は内面がナデ、外面はヘラケズリか。6・7は瓦器椀の高台部。ともに内面はミガキを施す。8・9は瓦質土器の鉢の口縁部。8は口縁端部をつまみあげる。10は瓦質土器の火鉢。体部下半から底部にかけての破片で、体部に断面三角形の突帯を貼付する。8は2号土坑から、9・10は溝3、その他は包含層から出土した。

11~14は陶器である。11・12は土瓶。11は口縁部で端部は玉縁状に肥厚する。外面には三条の線が白色釉で描かれる。胎は灰色で口縁部から内面にかけては露胎となる。釉は緑味を帯びた灰色である。12は底部で外面は露胎となる。胎は淡茶褐色で、内面に透明釉を施す。内面には細かな貫入がみられる。14は片口鉢の口縁部。口縁部を玉縁状に肥厚させる。胎は淡茶褐色で、透明釉を施す。12が2号土坑から出土したほかは包含層からの出土。



第8図 鳥越下屋敷跡出土遺物実測図(1/3, 1/2, 2/3)

15・16は石鎌。1は長さ1.8cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重量0.5gを測る。16は剥片鎌の側縁部と考えられる。裏面も素材となる剥片面を残して縁部に加工を施す。17は縦長剥片の周縁部に使用のためと思われる刃こぼれが残る使用痕剥片である。長さ3.0cmを測る。いずれも姫島産の黒曜石製品。遺構検出面から出土した。

18は瓦質の製品。調整はナデ。色調は黄褐色を呈する。全形は知れない。

19は亀形の銅製品。右半身が残る。体部には亀甲がある。前脚には水掻きを持つ。皮膚の質感もあり、写実的に表現されている。後脚は泳いでいる姿を現したものか。裏面には煤状の黒色粒子が付着する。飾り金具の一種と思われる。長さ6.4cm。3号溝から出土した。

20は径3mmのガラス玉。わずかに緑味がかった薄いブルーを呈する。2号土坑から出土した。

21はガラスの玉に径3mmの心棒が中央部付近まで挿入されている。ガラスは風化し、黄白色を呈する。3号溝から出土した。22は円盤状のガラス製品。3号溝から出土した。23はガラス製の薬瓶である。口径1.6cm、幅3.0cm、高さ6.7cmを測る。体部は横断面が八角形になるが、一辺にはスパイドを装着するための凹みが造りつけられる。体部下半は部分的に歪む。色調は薄い青色を呈する。表面には会社のエンブレムの下に製品名の「三日目薬」の文字がある。裏面に型押しされた「田代資業株式會社」は、1847年（弘化4）創業の久光製薬に引き継がれる。表土から出土した。

4　まとめ

これまで、鳥越下屋敷遺跡が立地する中川の谷筋の上流域では、圃場整備や道路整備に伴ういくつかの発掘調査が実施されている。そのうち、鳥越園田遺跡では中世の溝状遺構やビットが、鳥越今井野遺跡では中世期の小規模な掘立柱建物や溝状遺構などが確認されている。今回の調査では、弥生時代後期から現代に至る遺物が出土しているが、3号土坑が弥生時代と考えられるほかは現代の遺構であった。後世の削平が著しいものの、出土遺物からみると弥生時代、奈良時代、鎌倉時代の小規模な集落が存在していたとみられる。

また、当該地の一帯には740年（天平12）に起きた藤原広嗣の乱を平定したとされる「上毛郡擬大領紀宇麻呂」の館が存在したとの伝承があるが、関連する遺構等については今後の調査の進展のなかで明らかになっていくであろう。

IV 大村湯福遺跡

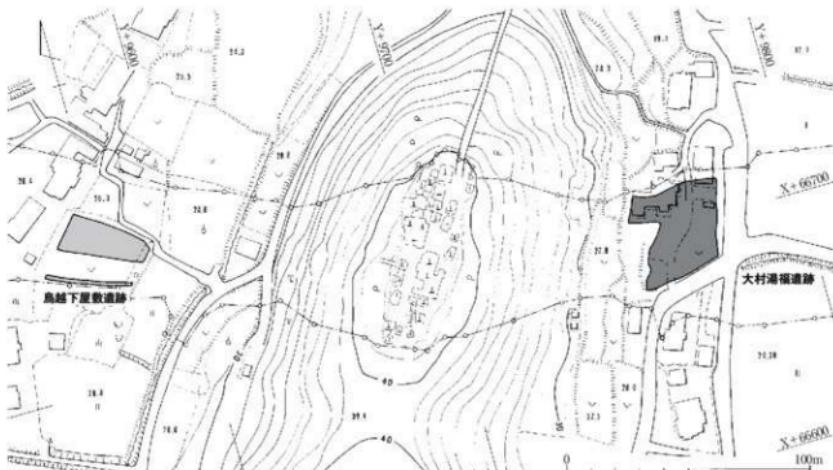
1 調査の経過

大村湯福遺跡は、国見山（637.8 m）から北東に延びる丘陵の先端部付近の東麓に立地する。中津工事事務所第20地点にあたり、豊前市大村 205-1, 216, 217-1, 220-2 に所在し、現状は宅地および耕作地として利用されてきた。現地は鈴木谷の地名で呼ばれており、天平12（740）年の藤原広嗣の乱にも関わった上毛郡擬大領の紀字磨の屋敷があったとの伝承が残っている。しかしながら、これまで福岡県教育委員会および豊前市教育委員会が行なった分布調査の結果では埋蔵文化財包蔵地としては認識されていなかった。

西日本高速道路株式会社中津工事事務所からの依頼を受け、平成24年3月7日に九州歴史資料館が実施した試掘調査の結果、時期は不明ながらも遺構の存在が確認されたため、1,100m²について今回発掘調査を実施することになった。地形的には丘陵東麓にあたり、調査区西側には急傾斜で丘陵が迫り、逆に東側の水田よりは一段高いが、遺構面自体は比較的平坦であり西側の一部を除いて標高20.0～21.0 m間に納まる。

2 調査の概要

調査は、地形的な制約から高速道路用地内で排土を移動することが困難であったため、調査対象地を東西に二分して排土を移動しながら二工程で実施した。西半部は平成24年8月16日から重機による表土掘削作業を開始し、9月4日から作業員による手作業での遺構検出および掘削作業を行なった。9月10日には座標に基づいて杭を設定し、測量・実測作業を開始した。遺構の掘



第9図 大村湯福遺跡遺構配置図 (1/2,000)

削がほぼ終了するのを待って、9月27日にラジコンヘリによる空中写真撮影、10月3日には残りの実測作業も終了している。翌10月4日から再び重機を投入して西半部の埋め戻しを行ないながら東半部の表土掘削作業を行ない、10月10日から手作業による検出・掘削作業、11月15日に空中写真撮影、11月20日に記録類を含めた現地での全ての作業を終了し、その後機材類の撤収等を行なった。

今回の調査で検出した主な遺構は、中世の井戸状の土坑1基、時期不明の土坑10基以上、近世の溝3条以上などである。

3 遺構と遺物

土坑

今回の調査で検出した土坑状の掘り込みは10基以上検出した。このうち明らかに現代のものは搅乱として除外したが、それ以外にも近現代に属すると思えるものは多い。ここでは出土遺物や埋土の状況から近世以前に属することが確実と考えられる3基について記述する。



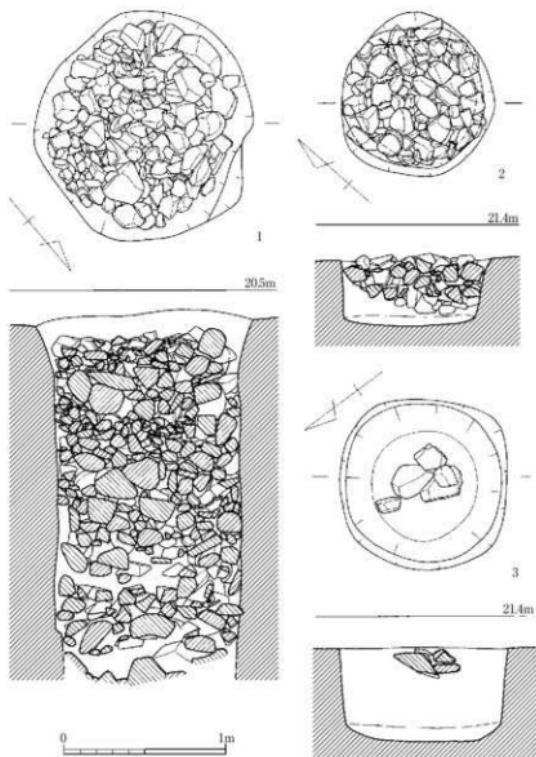
第10図 大村湯福遺跡遺構配置図 (1/300)

1号土坑（図版7、第11図）

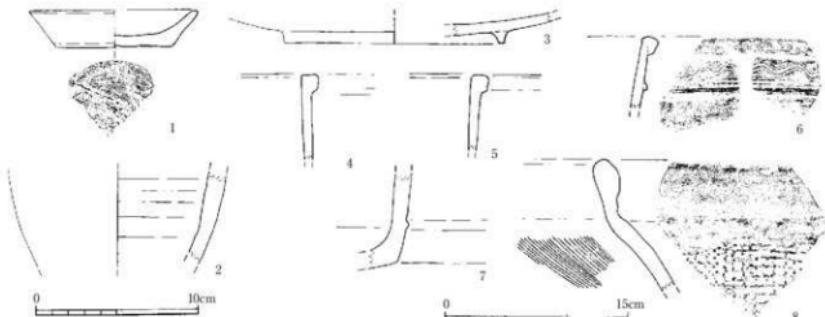
調査区北東部で検出した平面円形の土坑である。内部には10~30cm大の石が充填されており、ほぼ自然石であるが五輪塔の火輪等も出土している。深さ2.2mまで掘り下げるところに危険と判断して以下の掘削を中止した。平面形はほぼ円形で、上縁部で径1.3~1.5m、中位で1.1m程度となる。底部まで検出していなかったものの、遺構の形状から判断すると井戸跡である可能性が高い。

出土遺物（図版10、第12図）

1は土師器皿で、復元口径10.2cm、器高2.2cm。2は陶器壺であろう。器壁は厚く露胎。3は土師質土器の盤と考えられる。復元高台径18.2cm。4~8は瓦質土器である。4~7は火鉢。4・5は口縁部外縫を肥厚させる。6は口縁部下の区画に櫛状工具による波状文を施文する。7



第11図 1~3号土坑実測図 (1/30)



第12図 1号土坑出土遺物実測図 (1・2 : 1/3, 3~8 : 1/4)

は体部下位に1条の突帯が巡る。8は甕で、体部外面には格子目の叩打痕が残り、内面はハケメ後ナデ調整。

2号土坑（図版8、第11図）

調査区中央西寄りに2・3号土坑が0.5mの間隔で2基並んだ状態で検出し、2号土坑はその北西側の土坑である。形状は平面円形で、上縁部で径0.9～1.0m、底部で0.7m、深さ0.4m、内部には5～20cm大の自然石が充填されていた。図示できる遺物の出土はない。

3号土坑（図版8、第11図）

2号土坑の南東側にある。平面形状は円形であり上部で径1.05m、深さ0.55m。内部には上位から15～30cm大の自然石数点が出土した。遺構の埋没の過程で混入したものと考えられる。図示できる遺物の出土はない。

溝

1号溝（図版9、第10・13図）

調査区東寄り部分を南北に継断する。調査区内で36.5m分検出し、南側はさらに調査区外に延び、北側については現状では調査区境付近で途切れている。ほぼ直線的であるが、形状は大きく乱れており、幅は一定せず両端で0.5m程度だが中央部付近では西側が広がって3.5m程になる。深さは最大でも0.2m程度である。調査区南半部で2号溝および3号溝とほぼ直角に交わる。また、1号溝の2・3号溝と交差する部分を中心に石列を15m分検出している。ほとんどは溝の西側のみに存在し、10～60cm大の不揃いな自然石を東側に面を揃えて粗く並べているが、南側5.7m分では東側にも同様の石列が存在しており、内法は幅40～50cm程度になる。この石列は、後述する3号溝の石敷の上位に存在している。

出土遺物（図版10、第14図）

1は陶胎染付の火入である。体部外面から口縁部内面まで施釉し、釉は灰色で貫入が入る。内面は釉が垂れた痕跡が残るが、本来露胎であろう。2は土師質土器鍋で、体部外面は火を受けたためか赤変しており、また内面は器面が剥離している。3は瓦質土器甕で、底径17.0cm。

2号溝（図版9、第10・13図）

調査区の南半部にある東西溝で、東側は調査区外に延び、すぐ南側の3号溝とほぼ平行して並んでいる。19m分を検出し、中央やや東側で1号溝と直交し、この東側で遺構の形状が乱れている。西側部分で幅1.3m、深さ0.2m程度、東端部で幅2.3m、深さ0.5m、中央東の最大部分が幅3.7m、深さ0.4～0.5m。交差部分から東側は当初の遺構検出作業では周囲の遺構面との区別が明瞭でないために発見できず、1・3号溝等を掘り進める過程で検出した。したがって両者の切り合い関係は明瞭ではないが、3条の溝の埋土は基本的に灰色～灰褐色粘質土であるのに対して、2号溝の東半部では褐色粘質土で明らかに相違し、この部分が最も古く埋没しているものと考えられる。

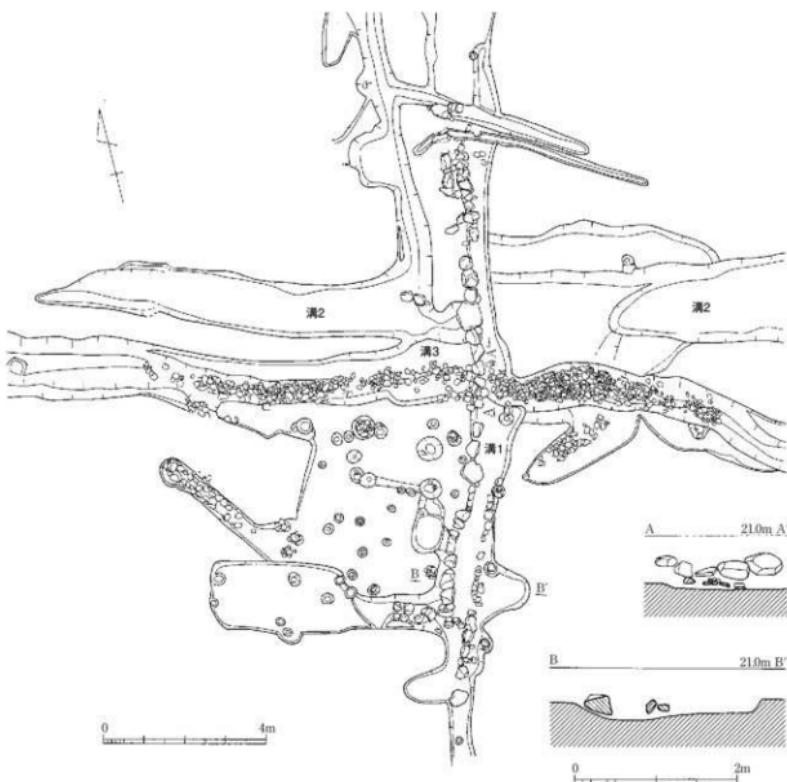
出土遺物（図版 10、第 14 図）

4～8 は陶器碗である。4・6・8 は褐色釉が掛かるが、4 は全面に施釉しており、6 は釉の風化が目立ち、疊付部のみ釉を掻き取り、8 は外面下位は露胎である。4 は胎土が茶灰色の炻器質であり、復元口径 12.0cm、高台径 5.4cm、器高 6.2cm。5 は全面白化粧土を掛け、外面体部上位は波状刷毛目を施す。7 は胎土が良好であるかは焼成不良の磁器の可能性もある。高台部以外に白色釉を掛け内面見込は蛇の目状に釉剥ぎする。

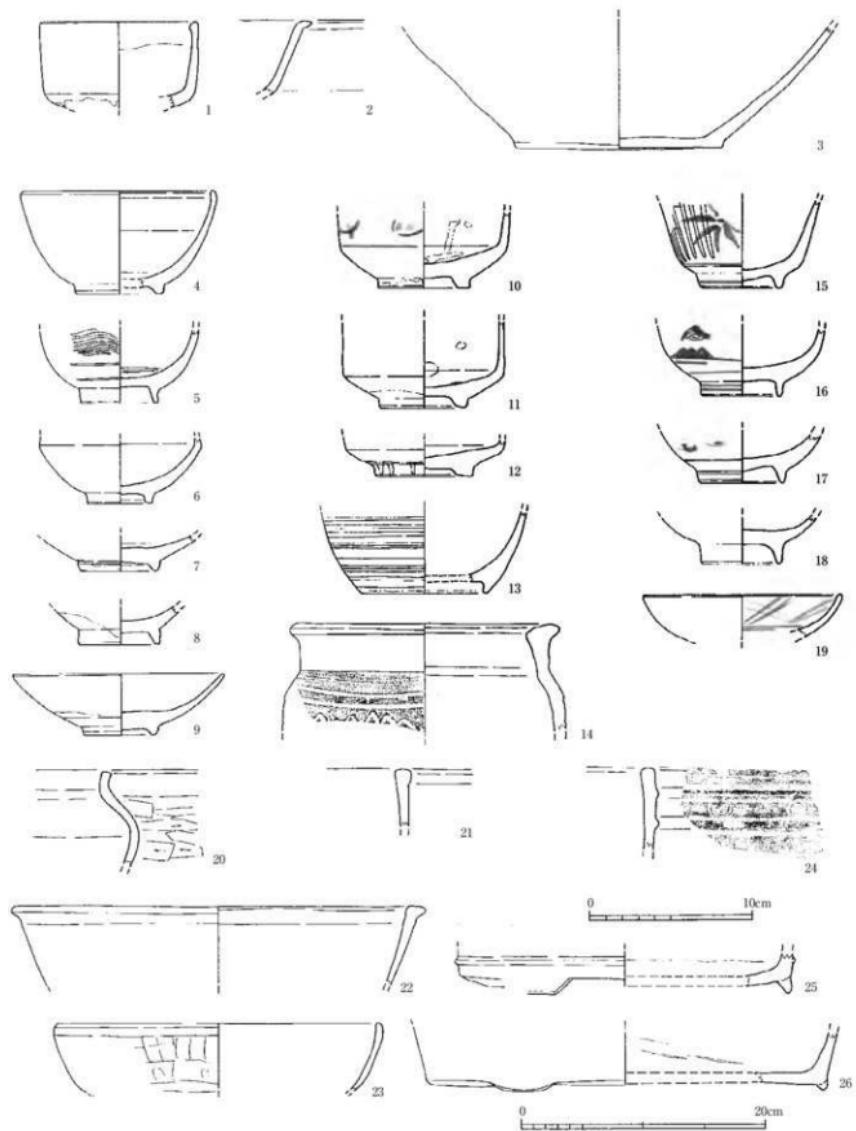
9 は陶器皿で、内面と口唇部までを銅綠釉、体部外面には透明釉を掛け分け、内面見込みは蛇の目釉剥ぎを行なう。復元口径 12.9cm、高台径 4.4cm、器高 3.7cm。

10～12 は陶胎染付の火入。3 点とも体部が直立する器形で、外面のみ灰色釉を掛け貯入が目立ち、高台部と内面は露胎である。10 は文様が残る。11 の釉はややは縁がかかる。

13 は瓶類で、体部は球形に近く、刷り底となる。疊付部以外の外面に施釉し、体部は白化粧土



第 13 図 1～3 号溝実測図 (1/120, 1/60)



第14図 1・2号溝出土遺物実測図 (1・4～19:1/3、2・3・20～26:1/4)

の横刷毛目の上に透明釉を掛ける。底径 7.8cm。

14 は陶器の小型甕で、肩部には 2 条の沈線と波状文が見られる。全面に光沢のない褐色釉を掛ける。復元口径 16.2cm、肩部径 17.2cm。

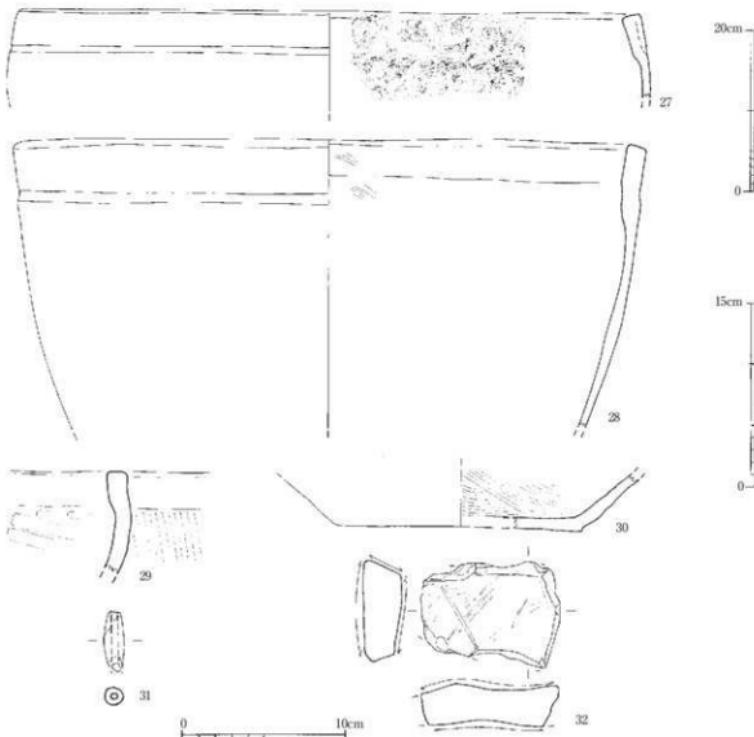
15～18 は染付碗である。15 は体部が直線的に立ち上がり、外面に鍋があり、天目形碗と思われる。釉は全面に施すが高台疊付部のみ釉剥ぎし、内面は青磁釉であろうか。また外面は風化が目立つ。文様は笹文か。16～18 は体部に丸味を持ち、高台疊付部の釉を剥ぎ取る。16・17 は胎土が灰色でやや粗く、呉須は 16 が暗緑灰色、17 が黒色に発色し、18 は釉が白濁して厚く掛かる。粗製の磁器であろう。

19 は染付皿で、格子文を描き呉須は暗緑灰色に発色する。復元口径 12.0cm。

20 は瓦質土器釜であろう。口縁部と体部の境が不明瞭で、体部外面はヘラケズリ調整で仕上げる。

21・22 は瓦質土器鉢。2 点とも口縁部外面を肥厚させ、上面に平坦部をつくる。22 は復元口径 34.0cm。

23 は土師質土器焙烙で、口縁部をわずかに内擗させる。体部外面はヘラケズリ調整で、器面は



第 15 図 2 号溝出土遺物実測図 (27 : 1/6, 28～30 : 1/4, 31・32 : 1/3)

黒変しており、口縁部外面には煤が付着している。復元口径 27.0cm。

24～26 は瓦質土器火鉢。24 は口縁部下の 2 条の突帯の間にスタンプ施文する。25・26 は底部に脚を有する。

27～30 は瓦質土器甕である。27 は大形品で内面は青海波状の当具痕が残り、後ナデ調整。30 はハケメ状の板状工具によるナデ調整、それ以外はナデ調整で仕上げる。27 は復元口径 76.6cm、28 は 51.8cm。

31 は土鍤で、端部を欠失するが、現状で長さ 3.6cm、径 1.2cm、重さ 4.0g。

32 は砥石。砂岩で、4 面を砥面として使用した痕跡がある。

3号溝（図版 9、第 10・13 図）

2 号溝のすぐ南側にあるこれとはほぼ平行する東西溝で、調査区東寄り部分で 1 号溝と交差し、東側調査区を越えてさらに調査区外に延びる。23 m 分を検出し、幅 1.2～1.5 m、深さは最大 0.3 m 程度である。溝の両端を除く約 14m 分の溝底には 10～20cm 大の自然石が敷き詰められていた。遺構検出の段階では 1・3 号溝は埋土も灰色～灰褐色と同様であり先後関係は不明瞭であったが、3 号溝の石敷きが直交する 1 号溝の石列の下位にあることから、3 号溝が先行すると考えられる。

出土遺物（図版 11・12、第 16・17 図）

1～4 は陶器碗。1 は全面に透明釉を掛け、高台疊付部のみ搔き取る。復元口径 12.0cm、器高 7.6cm。2 は高台周辺以外の内外面に白色の釉を施すが、釉は粗く光沢もなく、胎土も含めて焼成不良である。復元口径 11.7cm、器高 6.8cm。3・4 はいずれも白化粧土によって、3 の体部内面は打刷毛目、見込は同様の工具で菊花状に、外面下位は横刷毛目で中位の文様は九曜か。4 は内外面とも洗練された波状刷毛目を施す。

5 は陶器皿。内面と外面上位に施釉するが、灰色～灰白色化しており焼成不良のものである。

6 は陶器鉢。底部は削り底で、内面と外面上半部に褐色釉を施す。復元口径 11.3cm、器高 5.9cm。

7 も鉢であろうか。内面のみ黄褐色釉を掛け、外面は露胎となる。

8 は陶器火入であろうか。残存部では内外面とも露胎であるが、暗緑色釉が飛散した痕跡がことに内面に多く残る。

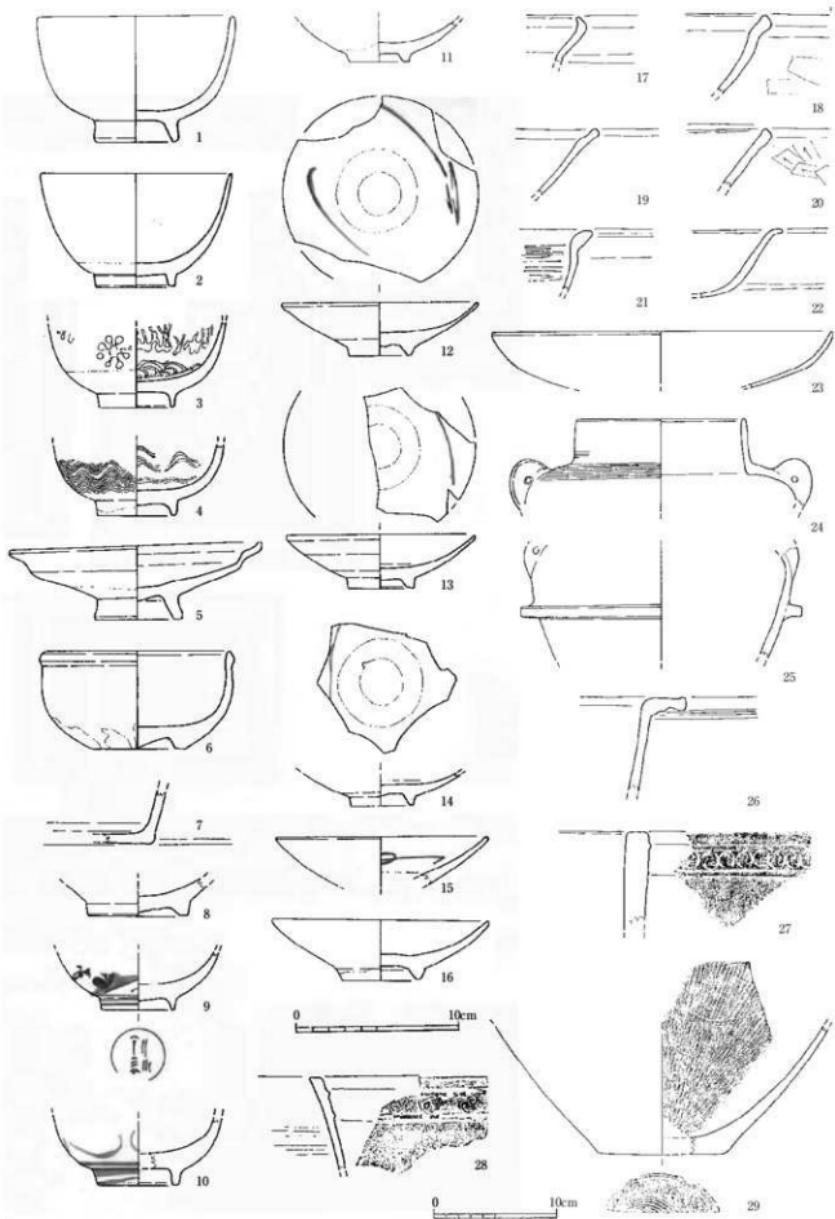
9・10 は染付椀で、9 はいわゆる「くらわんか椀」、10 は陶胎染付か。

11～16 は磁器皿で、6 点とも見込を蛇目釉剥ぎする。11～14 は呉須はやや緑がかった発色する。12～14 は文様からセッタかと思われる。12 は口径 11.9cm、器高 3.2cm、13 が復元口径 11.5cm、器高 3.2cm。15・16 は胎土が灰白色で、釉は黄色がかった白色であるが焼成が悪く光沢がない。2 点はやはりセッタである可能性がある。15 は復元口径 12.8cm、16 は口径 13.0cm、器高 3.6cm。

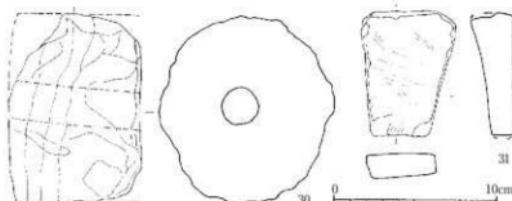
17～22 は土師質土器鍋で、すべて外面には煤が付着する。18・20 は体部外面にヘラケズリ調整が明瞭に残る。19 は体部外面上半部はナデ調整、下半部はヘラ・22 ケズリ調整か。21 は体部外面をヘラケズリ調整の後ヨコナナデ調整で仕上げ、内面にはヘラミガキ状の調整痕が残り、比較的丁寧な作りで、焼成も良好である。

23 は土師質土器で外面全体に煤が付着しているが、器形的に浅く、焰烙であろう。内面ナデ調整、外面ヘラケズリ調整。復元口径 28.0cm。

24・25 は瓦質土器釜である。24 は口縁部が高く立ち上がり、体部にはカキメ状の調整痕が残る。



第16図 3号溝出土遺物実測図① (1~16:1/3, 17~29:1/4)



第17図 3号溝出土遺物実測図② (1/3)

復元口径 13.9cm。25は軟質で器面の風化が激しく、外面には煤が付着する。復元体部径 21.4cm。

26は瓦質土器鉢であろう。全面ヨコナデ・ナデ調整で仕上げる。

27・28は瓦質土器火鉢で、27は器壁が厚く口縁部が直立し、角火鉢かと思われる。

28は薄く内傾し、焼成が土師質である。2点とも口縁部下の2条の突帯の間に二つ巴文をスタンプ施す。

29は肥前系の摺鉢で、底部は糸切りで内面全面に櫛状工具による細かい条線が重複しながら密に入る。復元底径 10.4cm。

30は輪羽口である。外径が 11.5cm と大形であるのに対しても内径は 2.2cm と小さい。先端部は高熱のため黒変して溶融が若干見られ、また鉄滓状の融着物がある。鍛冶に関わる遺物であろう。

31は砥石で、石英斑岩製。長辺 4 面と、小口部の一部にも砥面として使用した痕跡がある。

4号溝 (図版7、第19図)

調査区東端部にある南北溝で、調査区内で約 20 m 分を検出し、幅 30 ~ 50cm、深さ 10cm 以下の小溝である。現状では両端部は形状が乱れて広がり東側調査区外に延び、全体はわずかに弧状を呈する。図示できる遺物の出土はない。

4まとめ

今回の調査で検出した主な遺構は、土坑 10 基以上と溝 4 条などであった。現地は現在まで宅地などとして利用されてきており、明らかに現代のものが出土する掘り込みは攪乱として除外したが、それ以外に一応遺構としている中にも近現代に属するものも含まれているものと思われる。

このうち、井戸跡かと思われる 1 号土坑は出土遺物からは概ね 16 世紀代に納まりそうである。一方 1 ~ 3 号溝については 16 世紀から 18 世紀前半までの遺物が出土しており、比較的長期間存続したものと思われる。遺構の性格については、立地や遺物の組成などから、屋敷地あるいはその周縁の施設である可能性が高いが、今回の調査範囲では建物跡やこれに直接伴う遺構を検出することが出来なかった。1 ~ 3 号溝も用途は不明瞭で、区画溝といえるものでもない。

大村湯福遺跡一帯は鈴木谷と呼ばれ、天平 12 (740) 年の藤原広嗣の乱に加わったとされる上毛郡擬大領の紀宇磨の邸宅があったとの伝承が残る。しかしながら、今回の調査範囲では関連する遺構・遺物は発見されず、それに代わって中世末から近世前期のこの地の人々の生活の痕跡と土地利用の一端を確認することができたといえる。

V 鬼木鉢立遺跡 2次調査

1 調査の経過

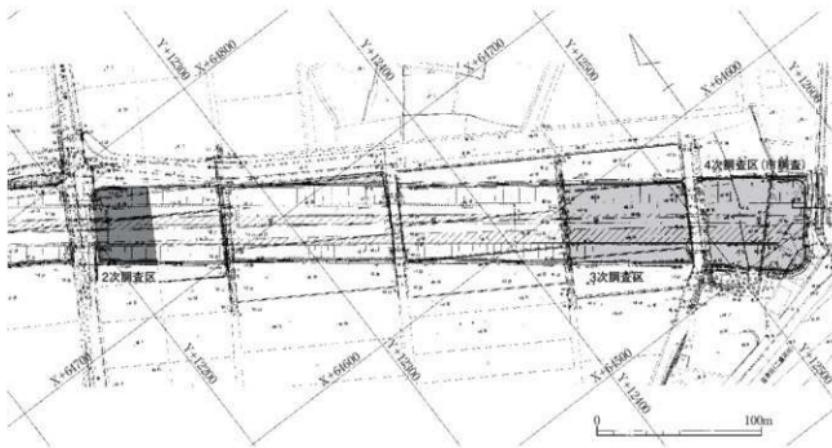
鬼木鉢立遺跡 2次調査区は、中津工事事務所第32地点にあたり、豊前市鬼木482～484に所在する。佐井川と岩岳川に挟まれた標高48mほどの低台地上に立地し、現状は水田として利用されてきた。豊前市教育委員会が調査を行なった鬼木鉢立遺跡1次調査区は、今回の調査区の南東に隣接するが、奈良時代を中心とした掘立柱建物跡と溝等を検出しており、溝からは弥生時代の銅矛の耳が出土している。また、北東に接する久路土塁跡では奈良・平安時代の掘立柱建物跡、溝、木棺墓と、落とし穴状土坑等を検出している。

西日本高速道路株式会社中津工事事務所からの依頼を受け、平成23年10月18・19日に九州歴史資料館が実施した試掘調査の結果、文化財の存在が確認された箇所のうち県道鬼木・三毛門線沿いの1,000m²について、鬼木鉢立遺跡2次調査として発掘調査を実施した。

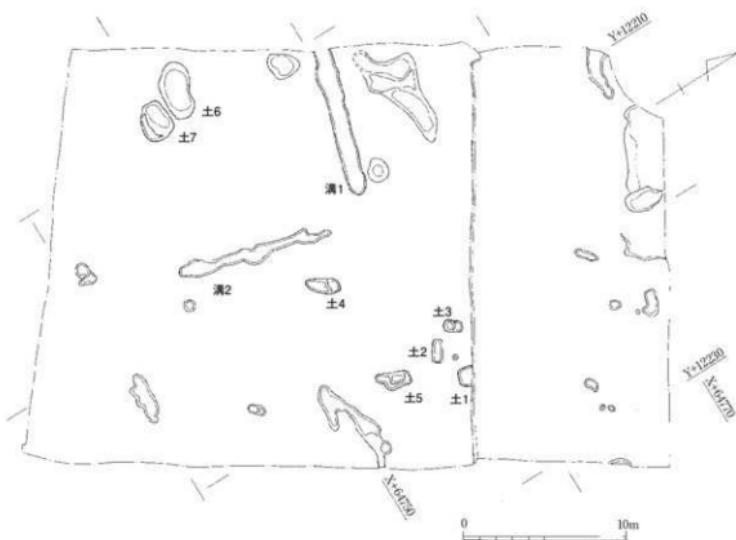
2 調査の概要

調査は、平成24年4月26日から重機による表土掘削作業を開始し、5月16日から手作業による検出および掘削作業、7月5日にラジコンヘリによる空中写真撮影を行ない、8月3日に全ての作業を終了した。

遺構面は礫層に灰褐色～褐色土が入り込んだ土壤で、現地表面から20～40cmで到達した。現



第18図 鬼木鉢立遺跡 2次調査位置図 (1/3,000)



第19図 鬼木鉢立遺跡2次調査遺構配置図(1/300)

地は水はけが悪く、また周囲からの湧水も激しかった。このため調査は連日ポンプ・手作業による排水作業と併行して行なわねばならず、梅雨の時期とも重なって水には悩まされた。

今回の調査で検出した主な遺構は、土坑10基以上、溝2条などだが、遺構に伴う遺物が僅少で、性格および時期の特定は困難である。

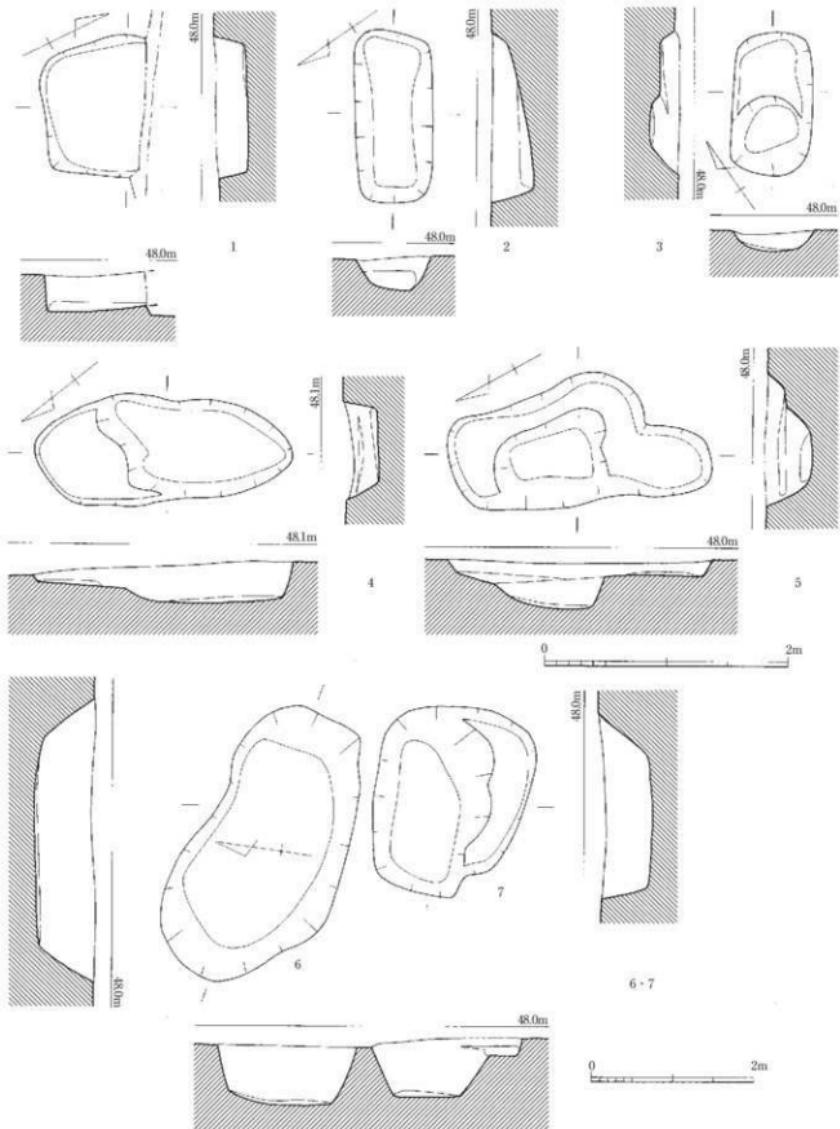
3 遺構と遺物

土坑

今回の調査では10基以上の土坑状の掘り込みを検出したが、何れも遺物の出土がなかった。埋土は暗褐色土あるいは黒褐色土で大差ないが、人為的でない可能性のあるものも含まれていると考えられる。ここでは形状等から判断して、ある程度確実に遺構と考えられるもの7基について記述する。

1号土坑(図版14、第20図)

調査区西寄り部分に1～3、5号土坑が比較的密集している。1号土坑はその中で最も東に位置する。遺構の北東側の過半部は現代の耕作に伴う削平で失われているが、平面形状は隅丸方形と考えられ、底面はほぼ水平となる。現状で1.2m×0.9m以上、深さ0.3m。



第20図 1~7号土坑実測図 (1/40、1/60)

2号土坑（図版 14、第 20 図）

1号土坑の南西にある。平面隅丸長方形で、底面は南東側が20cm以上高く傾斜する。長軸長1.4m、短軸長0.65m、深さ0.1～0.35m。

3号土坑（図版 14、第 20 図）

2号土坑の北にある。平面形状は丸味の強い隅丸長方形で、底部は南西側約半分がさらに一段10cm程低い二段掘り状になる。長軸長1.2m、短軸長0.65m、深さは最深部分で0.25m。

4号土坑（図版 15、第 20 図）

調査区ほぼ中央にある。平面形状はやや崩れた楕円形で、底部は南西側過半部が10cm以上低い二段掘り状になり、下段部底面はほぼ水平となる。長軸長2.1m、短軸長0.9m、深さは最深部分で0.3m。

5号土坑（図版 15、第 20 図）

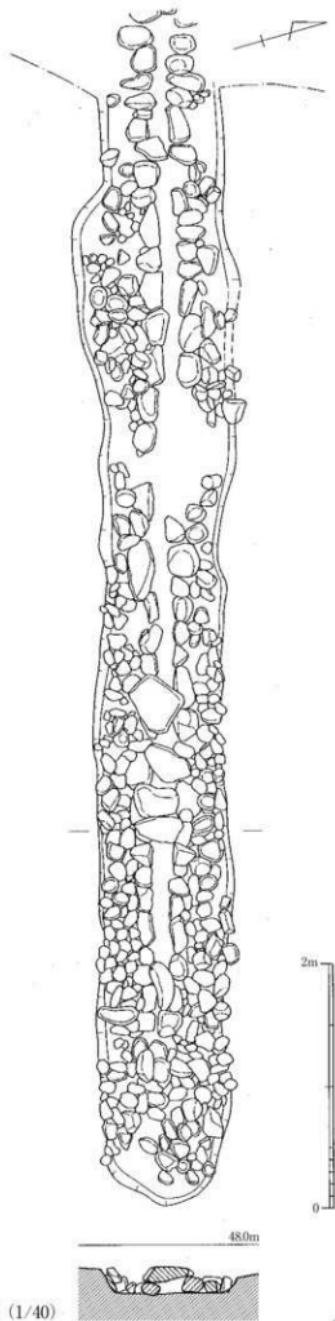
2号土坑の南にある。平面は隅丸長方形の南東側長辺中央部が広がった形状で、底部の一部が25cm程低い二段掘り状を呈し、上段底面は水平に近い。長軸長2.15m、幅は北東端部0.75m、中央部1.05m、南西端部0.5m、深さは上段部0.1～0.15m、下段部0.35m。

6号土坑（図版 15、第 20 図）

調査区西隅部近くで6・7号土坑が0.1mの間隔で並んでおり、6号土坑はそのうち北側にある比較的大形の土坑である。平面形状は不整形に近い楕円形で、長軸長2.35m、短軸長1.3m。底部はほぼ水平で、深さ0.5m。

7号土坑（図版 15、第 20 図）

6号土坑の南側に近接する。隅丸方形に近い不整形で、長軸長1.6m、短軸長1.25m。底部は北西側過半部が0.3m程深い二段掘り状で、下段部底面は水平に近く、深さ0.45m。



第 21 図 1号溝実測図 (1/40)

溝

1号溝（図版 16、第 21 図）

北西側調査区の中央部付近から東側に延びる石組溝で、調査区内で 9.8 m 分検出した。堀形はほぼ直線的に掘られ、幅 1.0 ~ 1.1 m、深さ 0.1 m 程度と浅い。石組には遺構面地山に含まれると同様な自然石河原石を使用し、20 ~ 30cm 大の石を堀形中央部に内面に面を揃える形で 0.1 ~ 0.15 m の間隔で二列一段に並べて水路とし、周囲には比較的小形の石を充填する。溝の一部では長辺 40cm 程度の扁平な石を水路部に被せている状況が確認できることから、暗渠といえる。

2号溝（図版 13、第 19 図）

調査区中央部やや南西にある。形状は乱れており幅も 0.3 ~ 1.0 m で一定していないが、大きくは直線的で南北方向に延び、長さ 9.7 m、深さ 0.1 m 程度。埋土は 1 号溝と同様の黒灰色土で、方向はほぼ直角になる。

出土遺物（図版 16、第 22 図）

2 号溝からは 3 点の土師器片が出土しているが、図示出来るものは 1 点のみである。1 は土師器碗の高台部であろう。高台はやや外方に開く。

その他出土の遺物

2 は調査区北半部の遺構検出中に出土した。陶器の甕あるいは壺の体部と考えられる。器壁は薄く、胎土は灰色で、外面にのみオリーブ色の透明釉をかける。

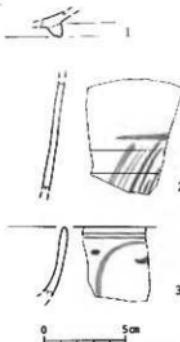
3 は表土掘削作業中に出土した。染付碗であるが、胎土が粗く充分に磁器化していない。内外面とも貫入が細かく入る。

4まとめ

今回の調査で検出した主な遺構は、土坑 7 基以上と溝 2 条などである。これらのうち土坑については遺物が全く出土しておらず、時期、性格とも不明と言わざるを得ない。

2 条の溝は端部が近接しており、方向は概ね直角となる。2 号溝からは数点の土師器破片が出土しているが、図示でき、またある程度時期を特定し得るものはわずかに 1 点であった。それは土師器碗の高台部で、小破片であるが 8 世紀後半から 9 世紀初頭頃の時期が考えられる。

隣接する鬼木鉢立遺跡 1 次調査および久路土棚掛遺跡では、ともに 8 ~ 9 世紀代の掘立柱建物跡、溝等を検出しておらず、それは先述の土師器の時期と整合する。しかしながら、上記 2 遺跡の溝と今回調査をした 2 条の溝とでは方向が合わず、また土器破片 1 点で遺構の時期を決めるこにも躊躇する。いずれにしても、位置から考えて隣接する 2 遺跡と関連する遺構が含まれていることは確実と思われ、集落の一部を確認した可能性があるというに留めておきたい。



第 22 図 鬼木鉢立遺跡
2 次調査出土遺物実測図
(1/3)

VI 鬼木鉢立遺跡3次調査

1 調査の経過

調査対象地の地点名は中津32である。試掘・確認調査は平成23年10月18・19日に実施し、一部遺構を確認したため、本調査の必要ありと判断した。本調査の着手届は「24九歴第308号-18」、調査期間は平成24年8月23日～平成25年2月8日まで、調査面積は3,500m²である。埋蔵物発見届は「24九歴第1605号-22」、出土遺物の量は7箱である。

なお、鬼木鉢立（おんのきはこたて）遺跡第1次調査は、豊前市教育委員会による県営圃場整備事業に伴う発掘調査（平成13年4月25日～平成14年3月22日、約17,000m²）であり、報告書は平成25年に刊行された（豊前市教育委員会2013『鬼木鉢立遺跡・久路上廻掛遺跡』豊前市文化財調査報告書第31集）。

日誌抄

平成24年	8/23	重機掘削開始、西半部着手	11/9	掘立柱建物跡2棟確認
	9/4	建機搬入、作業員投入	11/12	1号竪穴住居跡検出
	9/6	1号土坑検出	11/13	1号土坑墓調査
	10/3	1号溝掘削	12/4	空中写真撮影
	10/9	トレンチ調査（1～4号）	12/11	埋戻し（～31）
	10/24	埋戻し（～31）	12/17	東半部南側重機掘削開始
	11/1	東半部北側重機掘削開始	12/25	1号土器棺墓検出
平成25年	1/9	2号住居跡掘削開始		
	1/30	空中写真撮影		
	2/8	調査終了		

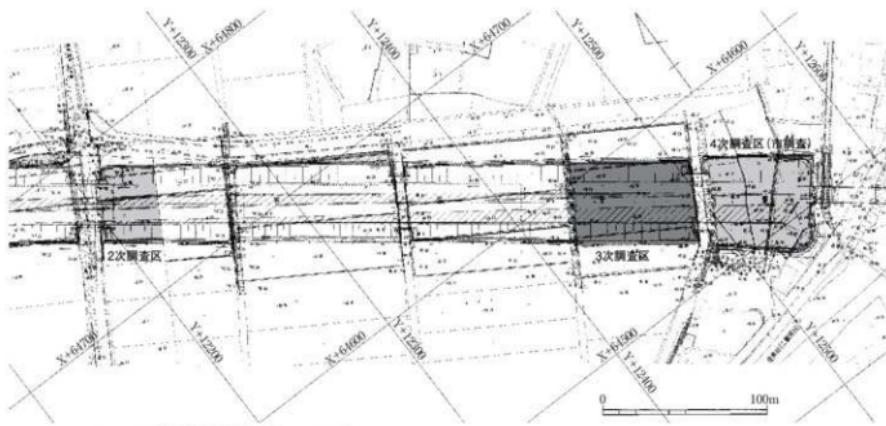
2 調査の概要

概要

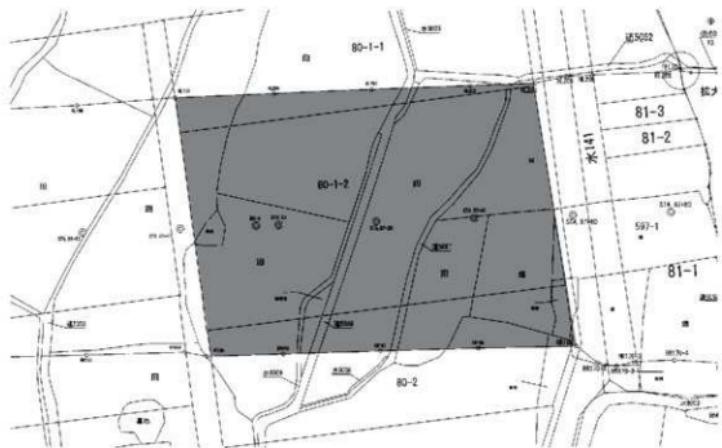
調査対象地は佐井川左岸に位置し、標高約49mの岩岳・佐井川扇状地に立地する。東九州自動車道関係の発掘調査は、3次調査区の北西260mの位置に第2次調査区、農道を挟んで南東側に4次調査区（豊前市の調査）が隣接する。

調査は排土移動などのため、西半部・東半部に分け、東半部はさらに南北に分割して実施した。西半部は、表土・圃場整備による客土の下位が黄褐色土と拳大～人頭大の礫の地山である。西半部東側は礫を多く含む暗茶褐色～黒褐色土によって埋没した埋没谷を検出した。この埋没谷は西半部と東半部の境まで幅約20mあり、南西～北東方向に伸びる。埋没谷の上面では圃場整備前の暗渠を検出した以外、検出された遺構はなく、埋没谷以外の部分も遺構分布は稀薄である。

東半部は、北側の地山は黄褐色土、南側はほとんど礫である。遺構密度は北側が高く、南側の礫地帯では稀薄である。調査区内で広範囲に分布する礫は地形的にみても佐井川の氾濫による堆積であり、遺構が検出できた範囲は若干標高が高い場所である。

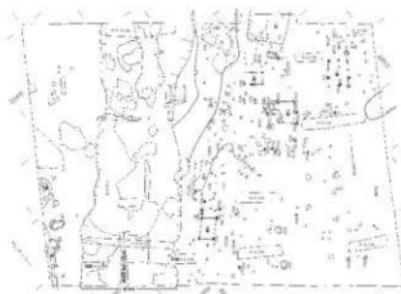


1. 2～3次調査区位置図 (1/3,000)



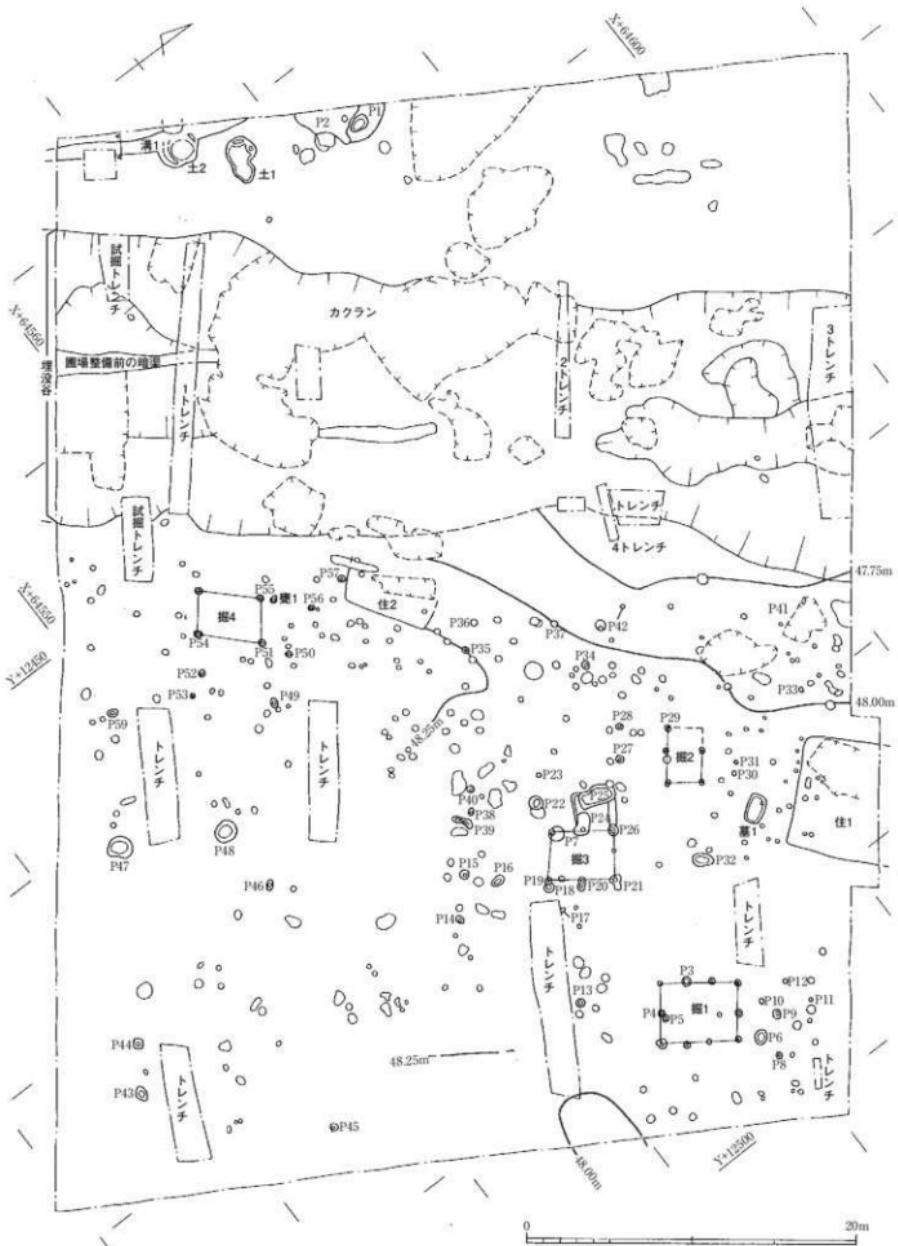
2. 3次調査区と
圃場整備前の地割①
(1/1,000)

0 30m



3. 3次調査区と
圃場整備前の地割②

第23図 鬼木鉢立遺跡調査区位置図 (1/3,000, 1/1,000)



第24図 鬼木鉢立遺跡3次調査遺構配置図 (1/300)

トレンチ（第25図、図版18・19）

旧地形や地盤の状況を確認するためにトレンチを4箇所設定した。この内1～3号トレンチについて所見を述べる。

1号トレンチ

調査区東半部南側に設置した。長さは16.7mである。トレンチ東側・中央部分では擾乱が見られ、トレンチ中央部分では人頭大の礫が多く見られた。トレンチ西側は埋没谷の肩である。

2号トレンチ

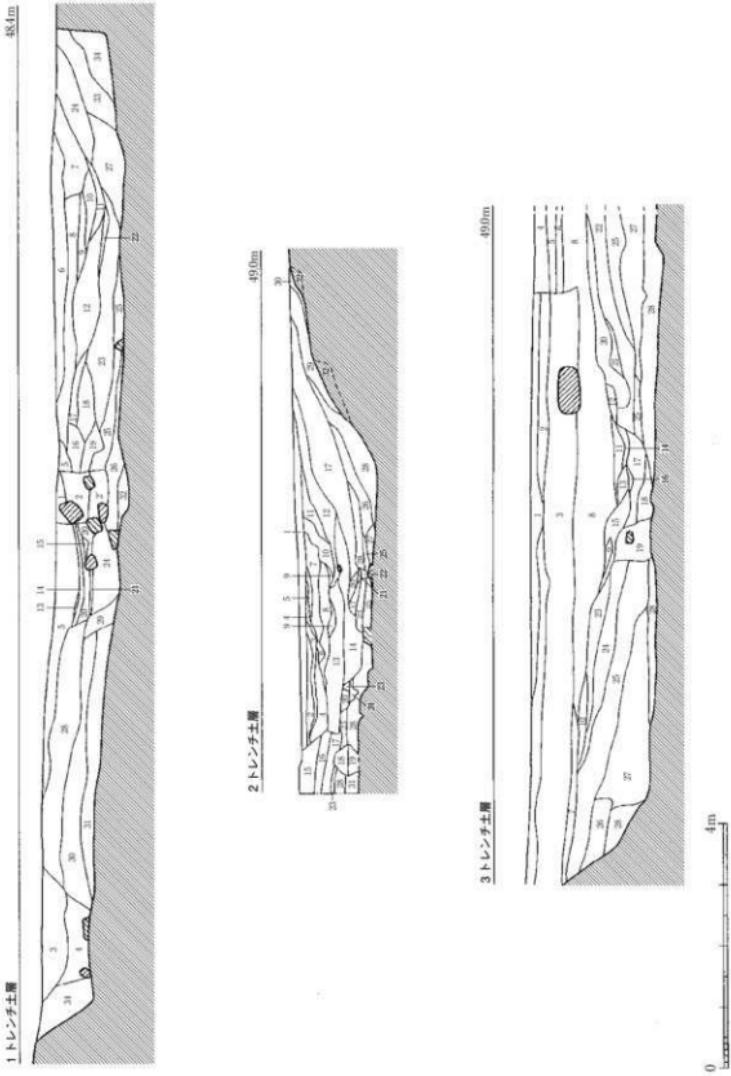
調査区東半部中央に設置した。長さは黒褐色土の落ち際から9mである。埋没谷の肩の傾斜は緩やかであり、地表下約0.55mのところで鉄分を多く含む層になる。

3号トレンチ

調査区北東壁沿って設置した。長さは11mである。トレンチの西側では、3層にコンクリート片等が混入し、1・2層由来の土がブロック状に混入していた。圃場整備時の客土と考えられ、調査区各所で見られる擾乱も同様のものであると考えられる。トレンチ西端から約5mの所に地形の落ち込みが見られ、下部は礫が混入し、28層では礫が主体となる。8層の上面は遺構検出面と同様の色調を呈しており、トレンチ内では土器が出土した。

第2表 1号トレンチ土層断面注記一覧

番号	土層名	土色	特徴
1	黒色粘質土	75YR2/1	粘性や弱。
2	黒褐色粘質土	75YR3/1	粘性強。灰黃褐色砂が混じる。2は若干色調明るい。
3	黒色粘質土	10YR2/1	粘性やや強。5～20cmの礫少。
4	黒褐色砂礫	75YR2/2	礫まり無し。2～5cmの礫が密に混じり。下部には10cmの礫有り。
5	黒褐色粘質土	10YR3/2	粘性弱。粒子が細く小礫も混じる。弥生土器・鶴鳥産黒曜石有り。
6	黒褐色砂質土	75YR3/1	粘性やや弱。灰黃褐色土が部分的に混じる。粒子粗い。
7	黒褐色砂質土	75YR3/2	粘性弱。3cmの礫極少量。
8	灰褐色砂質土	10YR4/2	粘性極弱。粒子が細かい。
9	にぶい黄褐色砂	10YR4/3	礫まり無し。川砂に似る。
10	暗褐色砂質土	10YR3/4	礫まり無し。粒子粗い。
11	黒褐色砂質土	10YR3/2	粘性やや強。
12	褐色砂質土	10YR4/1	粘性弱。3～7cmの礫と同。
13	黒褐色粘質土	75YR3/1	粘性強。黄褐色土・炭化物・鉄分が極少量。
14	灰褐色砂質土	10YR5/2	粘性無し。礫まり無し。13層と同質の土と互層状に堆積。極度に磨滅した土器包含。
15	灰褐色砂質土	10YR5/2	黒褐色土が14層より多く、斑点状に混じる。
16	黒褐色砂	75YR3/2	礫まり無し。粒子が粗い。1cm以下の小礫多。3～5cmの礫極少。遺物有り。
17	褐色砂質土	10YR4/4	粘性やや弱。1～3cmの礫有り。粒子粗い。
18	黒褐色砂	10YR3/2	2～5cmの礫多。2トレンチ7層と同。土器片有り。
19	黒褐色砂質土	10YR3/2	粘性やや強。礫は極少。粒子細かい。
20	黒褐色粘質土	75YR3/2	にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土がマーブル状に混じる。14層と似るが、砂質土少。
21	黒色粘質土	10YR2/1	粘性強。粘土に近い。遺物有り。
22	黒褐色砂	10YR2/2	礫まり無し。粒子細かい。
23	暗褐色砂礫	10YR3/4	1～7cmの礫多。下部には15cmの礫多。
24	黒褐色砂礫	10YR2/2	2～5cmの礫多。砂の粒子は粗い。土器片有り。
25	黒色粘質土	10YR2/1	粘性やや弱。2トレンチ17層と同。
26	灰褐色粘質土	75YR4/2	粘性強。礫無し。
27	にぶい黄褐色粘質土	10YR4/3	粘性強。灰褐色土(10YR4/2)に近い。3cmの礫有り。3トレンチ27層と同。
28	黒色粘質土	10YR2/1	25層と同。
29	黒褐色砂質土	10YR3/2	粘性強。5～20cmの礫多。
30	褐色砂礫	10YR4/6	20～30cmの礫多く、2cmの礫有り。褐色粘質土が無理かに混じる。
31	褐色砂礫	10YR4/6	礫まり強。30層より2～5cmの礫少。1cm以下の砂礫と褐色粘質土多し。30層より明るい。
32	暗褐色砂質土	10YR3/4	砂粒粗い。
33	黒色粘質土	10YR2/1	粘性強。1cmの小礫多。20～50cmの礫混じる。粘質土少。2トレンチ29層と同。
34	にぶい黄褐色砂質土	10YR4/3	粘性極弱。3～5cmの礫がほとんど。砂礫は粒子が粗い。



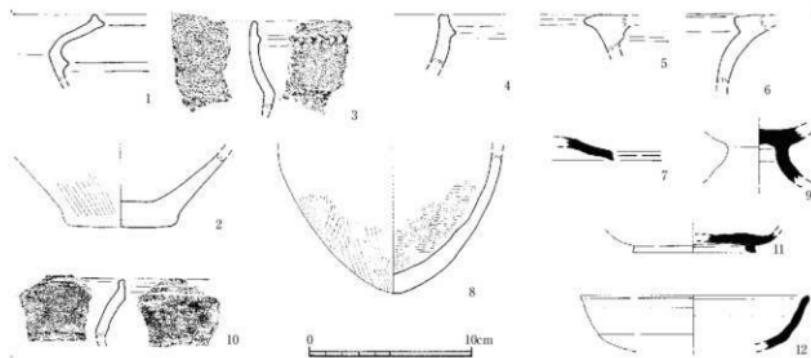
第25図 1～3号レンチ土層断面実測図 (1/80)

第3表 2号トレント土層断面注記一覧

番号	土層名	土色	特徴
1	黒褐色粘質土	10YR3/2	粘性弱。やや砂質。桜色を呈する鉄分の沈着物有り。
2	暗褐色紗質土	10YR3/3	粘性極弱。きめ細かい。
3	灰黃褐色紗	10YR4/2	粘性極弱。きめ細かい。水流による堆積。
4	黒褐色粘質土	10YR3/2	粘性中。やや砂質。1層より色調明るい。下部には粘質土が疊らに混じる。赤生上部包含。
5	黒褐色土	7.5YR3/1	粘性極弱。灰黃色が斑状に混じる。
6	灰褐色紗	10YR4/1	粘性極弱。3層より粒子やや大。
7	黒褐色土	7.5YR3/1	粘性弱。F部に灰黃褐色(10YR5/2) 粒が斑に混じる。
8	暗灰色紗質土	10YR4/1	粘性極弱。13層との境界面付近に領域窓有り。
9	灰褐色紗質土	10YR4/1	8層より薄まり崩。水分多し。上部に鉄分の沈着物有り。
10	灰黃褐色紗質土	10YR5/2	粘性中。黒褐色土極少。下部に疊らに灰黃褐色粘質土有り。
11	黒褐色粘質土	7.5YR3/1	粘性弱。範い。
12	暗褐色紗	10YR3/3	部分的に粒子が埋められた箇所有り。
13	黒褐色紗	10YR2/2	塊状大確 85%。人頭大確 5%。砂 10%。紗は鉄分のためか若干赤味を帯びる。遺物多し。
14	灰黃褐色紗	10YR4/2	13層とはほぼ同様。紗の色のみ異なる。遺物多い。
15	にぶい黄褐色粘質土	10YR4/3	粘性弱。
16	黒褐色粘質土	10YR3/2	15層より粘性強。
17	黒褐色粘質土	2.5YR2/1	粘性強。調査区内の地形変換点の黒色はこの層に由来。遺物包含層。
18	黒褐色紗	10YR3/2	粒子大。範い。用砂に似る。19層と一連の層。
19	暗褐色紗	10YR3/3	2~10mmの小礫多し。用砂に似る。
20	陶灰色紗	10YR4/1	9層に似る。
21	暗灰色紗	10YR4/1	20層に似るが、やや暗い。
22	暗灰色粘質土	10YR3/3	粘性強。下部に鉄分の沈着物有り。
23	黒褐色粘質土	10YR2/2	粘性やや強。きめ細かい。部分的に同色粘土か帶状に入る。
24	灰黃褐色紗質土	10YR4/2	粘性弱。下部で鉄分が沈着し硬化する。
25	灰黃褐色紗質土	10YR4/2	24層と似る。
26	にぶい黄褐色粘質土	10YR4/3	粘性やや強。石英粒混じる。
27	暗灰色紗質土	10YR3/3	粘性極弱。範い。2~5cmの礫が50%占める。
28	灰黃褐色紗質土	10YR5/2	粘性弱。きめ細かい。
29	黑色紗	2.5Y2/1	17層と同色。1cm~拳大の礫が90%を占める。
30	陶灰色粘質土	7.5YR4/4	粘性やや強。拳大~人頭大確多し。調査区北西側の遺構検出面。
31	灰黃褐色紗質土	10YR5/2	28層に似るが、2mmの紗多し。
32	黃褐色紗	10YR5/6	地山。拳大~人頭大の礫多し。2~5mmの小礫が間際に入る。

第4表 3号トレント土層断面注記一覧

番号	土層名	土色	特徴
1	黒褐色粘質土	10YR7/1	耕作土。
2	にぶい黄褐色土	10YR5/3	床土。1層や灰褐色(10YR5/3) が疊かに混じる。
3	-	-	圃場整備時の客土。人頭大~1m 大の礫多し。コンクリート片混じる。
4	褐色粘質土	10YR4/4	旧耕作土。色調は灰褐色(10YR5/6) も混じる。
5	灰黃褐色	10YR4/2	旧耕作土。色調は灰褐色(10YR3/2) も混じる。
6	黄褐色土	10YR5/6	旧床土。一部黒褐色(10YR3/2) が入る。
7	褐色粘質土	10YR4/4	旧床土。粘性弱。下部に灰黃褐色粘質土(10YR4/2) が混じる。
8	黒褐色粘質土	7.5YR3/1	粘性強。礫はほなし。調査区南西側の遺構検出面。北西側では消失。
9	暗褐色粘質土	10YR3/3	粘性弱。にぶい黄褐色紗(10YR4/3) がマーブル状に入る。
10	黒褐色粘質土	10YR2/2	粘性強。礫無し。
11	にぶい黄褐色紗	10YR5/3	きめ細かく、範い。粘性弱の灰黃褐色粘質土(10YR4/2) がマーブル状に混じる。粘性やや強。他の褐色粘質土(10YR2/2) が混じる。
12	灰黃褐色紗質土	10YR4/2	粘性中。黒褐色(10YR3/3) ににぶい黄褐色(10YR4/3) が疊らに混じる。
13	黒褐色粘質土	10YR3/2	粘性極弱。黄褐色を呈する鉄分の帯状に混じる。
14	黒褐色粘質土	10YR3/2	粘性弱。黒褐色土(10YR2/1) が疊かに斑状に混じる。
15	暗褐色粘質土	10YR3/3	粘性極弱。黒褐色土(10YR2/1) が極端に混じる。
16	灰黃褐色紗	10YR5/2	赤褐色(2.5YR4/8) の鉄分の固着物有り。上位層の紗や砂質土に比して粒子が粗く、範い。
17	黒褐色紗	5YR3/1	2~5cmの礫がほとんど。2~20cmの礫の間に黒褐色紗(SYR3/1) が入る。
18	黒褐色紗	10YR2/3	15~20cmの礫が大。ほば礫。礫の間に紗入る。
19	にぶい黄褐色紗	10YR2/3	縦まり無し。黒褐色(7.5YR3/1)~黒色(7.5YR2/1) 粘質土が3~5cmのプロック状に部分的に混じる。
20	黒褐色紗質土	7.5YR2/2	粘性弱。5cmの礫が極少量。赤生土影響。
21	黒褐色紗質土	10YR2/2	20層と似るが、粘性やや弱く。茶色味を帯びる。
22	暗褐色紗質土	10YR3/3	粘性やや強。0.5~1mmの紗粒が多い。
23	褐色粘質土	7.5YR4/3	粘性やや強。黒褐色土が極少量疊らに混じる。
24	暗褐色粘質土	10YR3/3	22層と同。
25	黒褐色粘質土	10YR2/1	粘性強。3~5cmの礫が少星。遺物包含層。2トレンチ17層と同。
26	黒褐色粘質土	7.5YR2/2	6層と似るが、粘性やや弱く。紗粒多し。
27	灰黃褐色粘質土	10YR4/2	粘性弱。下部は赤褐色が若干多し。
28	暗褐色粘質土	10YR4/4	粘性弱。石英多く、粗い。3cm~人頭大の礫混じる。
29	黃褐色紗	10YR5/6	12層と。



第26図 1～3号トレンチ出土土器実測図(1/3)

出土遺物（第26図）

1は壺口縁部である。口縁は跳上口縁であり、頸部や下方に断面三角形の突帯をめぐらす。調整は内外面ナデ、色調は外面が白黄褐色～茶白褐色、内面が橙白褐色を呈す。2は壺あるいは堷底部であり、平底の底部付近に黒斑がある。調整は外面がハケメ後ナデ、内面がナデである。色調は外面が茶褐色～黒色、内面が暗黄茶褐色を呈す。胎土には雲母・角閃石を含む。3は深鉢か。口縁部は内傾しつつ伸び、ほぼ平坦な口縁端部や下方に低い刻目突帯をめぐらす。調整は内外面ナデ、色調は外面が暗黄茶褐色、内面が暗黄茶褐色～黒色を呈す。胎土に雲母・角閃石を含む。4は無頸壺か。口縁端部は凹み、やや下方に断面三角形の突帯を貼りつけ、内外面丹塗を施す。調整は内外面ナデ、色調は外面が焦茶～灰黄褐色、内面が灰黄褐色を呈す。胎土に雲母を含む。5は堷か。口頸部は内湾気味である。口縁部は平坦であり、口縁部や下方外縁の屈曲部に粘土を追加し、稜を有した段を付ける。この段の下部に若干丹塗が残る。調整は内外面ナデ、色調は内外面白黄褐色を呈す。胎土に雲母・角閃石を含む。6は壺口縁部である。口頸部は外反し、口縁部は鋸先口縁である。調整は内外面ナデ、色調は灰黄褐色～茶白褐色を呈す。7は須恵器坏蓋である端部は回転ナデによって四線状に凹み、先端がやや下方に曲がる。調整は内外面回転ナデ、色調は内外面灰色である。8は壺か。底部は尖底気味である。外面に煤が付着する。調整は外面が縱方向ハケメ、内面が横方向ハケメである。色調は外面が灰黄褐色～黒灰色、内面が灰黄褐色を呈す。胎土に雲母・角閃石を含む。9は須恵器低脚高坏である。調整は脚部が内外面回転ナデ、坏部がナデである。色調は内外面灰色である。10は縄文時代後期の磨消縄文土器の浅鉢か。短い文様帶に縄文を施し、2条の平行する沈線を施す。内外面に条痕がみられ、色調は外面が暗黄茶褐色、内面が暗黄茶褐色～灰色である。胎土に雲母・角閃石を含む。11は須恵器坏身である。口縁の立ち上がりは高台部分からやや外方である。調整は内外面回転ナデ、色調は内外面灰色である。12は須恵器坏身である。口縁端部は短くやや外方に反る。調整は内外面回転ナデ、色調は内外面灰白色である。断面を含めて、内外面の大部分に暗黄茶褐色の沈着物が付着する。

各土器の時期は、縄文時代後期が10、縄文時代晩期が3、弥生時代中期が1・4～6、2・8は弥生時代後期か、9は古墳時代後期、7・11・12は8世紀代と考えられる。

3 遺構と遺物

堅穴住居跡・土器棺墓

1号堅穴住居跡（第27図、図版19）

調査区東側に位置し、主軸はN-40°-Wである。北東隅部分が調査区の外に伸び、また、住居の北側1/3は圃場整備前の暗渠や水路による攪乱を受けている。規模は一辺680cm四方、平面形は方形で、残存する深さは30cmであり、約10cm貼床を施す。主柱は4本であり、検出した主柱穴は北東部を除く3基である。柱痕跡はなく、柱穴の規模は径約30cm、深さは約60cmである。屋内遺構は、壁際構が四周し、住居南東辺中央に深さ約15cmの土坑がある。また、住居中央に粘土塊の集中箇所があり、下位からは土器が出土した。焼土があるため、焼跡であろう。

出土土器から弥生時代後期の堅穴住居跡であると考えられる。

出土土器①（第28図、図版25）

1は東南側主柱穴から出土した壺の頸部～底部付近である。外面下半には微量の煤状の付着物がみられる。調整は外面がナデ、内面は工具によるナデである。色調は外面が灰黄褐色～暗黃茶褐色を呈し、胴部下半は焼成時の黒斑があり、内面は明赤褐色を呈す。胎土に角閃石を含む。

2は焼跡横から出土した壺の口縁部～胴部である。口縁は直線的に外反し、端部は平坦である。胴部内面には幅約5cmの粘土帯の雜ぎ目が残存している。調整は外面がナデ、内面が横方向の工具によるナデである。色調は外面が暗黃茶褐色で、一部焼成時の黒斑があり、内面は明赤褐色を呈す。胎土に角閃石・赤褐色粒を含む。

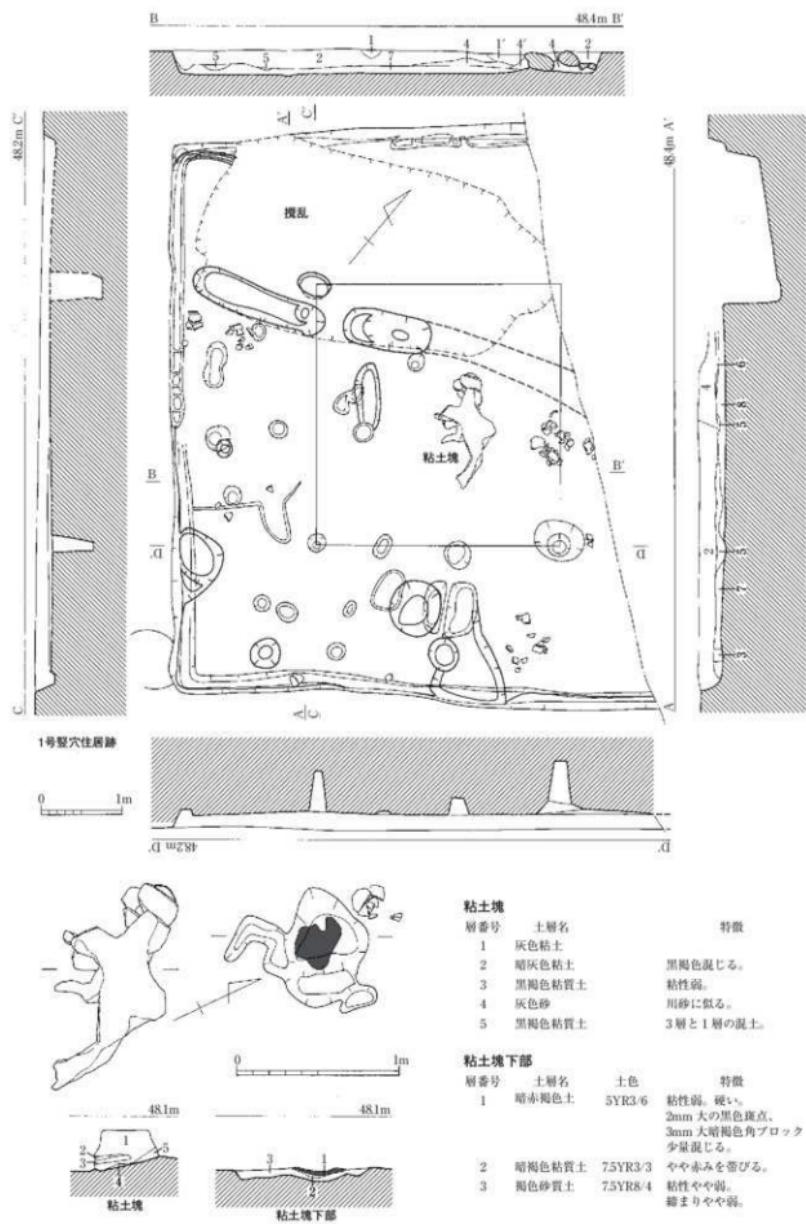
3～5は貼床直上で出土した壺である。3は口縁は直線的に外反し、端部はほぼ平坦である。胴部内面には幅約5cmの粘土帯の雜ぎ目が残存している。調整は口縁部が内外面ヨコナデ、胴部は内外面ナデである。色調は暗黃茶褐色～焦げ茶色を呈す。胎土に雲母・角閃石・赤褐色粒を含む。

4は口縁部が外反気味に伸び、端部は平坦である。胴部最大径は口縁部径より大きい。調整は口縁部が内外面ヨコナデ、頸部に縱方向のハケメが若干残る。胴部は外面が縱方向ハケメ、内面は縱方向ナデだが、調整不足で凹凸が激しい。色調は外面が茶褐色、内面が淡赤褐色を呈す。胎土に角閃石・赤褐色粒・雲母を含む。5は底部付近である。底部のは断面が磨滅しており、底部穿孔かどうかは不詳である。調整は外面が縱方向ハケメ、内面ナデである。色調は外面が茶褐色、一部焼成時の黒斑があり、内面は明赤褐色を呈す。胎土に雲母・赤褐色粒・角閃石を含む。

6～12は埋土中の遺物である。6は高坏の口縁部である。口縁は受部から外反し、端部は平坦である。調整は内外面ナデ、色調は内外面白黄茶色～茶褐色を呈し、口縁部外面には焼成時の黒斑

第5表 1号堅穴住居跡土層断面注記一覧

層番号	土層名	土色	特徴
1	暗褐色粘質土	7.5YR3/3	黒褐色土が少量混じる。後世の小穴か。I'は4層に似るが色調やや暗い。
2	黒褐色粘質土	7.5YR3/1	住居埋土。粘性弱。灰褐色（7.5YR4/2）が斑に混じる。
3	黒褐色粘質土	10YR3/2	住居に伴う小穴（住 Ipit01）
4	黒褐色粘質土	10YR2/2	住居埋土。黒褐色粘質土を主に褐色粘質土（10YR4/4）や灰黃褐色土（10YR4/2）がマーブル状に入る。色調やや異なる。
5	暗褐色粘質土	7.5YR3/3	褐色（7.5YR4/4）が斑点状に混じる。
6	明褐色砂質土	7.5YR5/6	貼床。粘性弱。織まり強。
7	褐色砂質土	10YR4/4	貼床。粘性弱。砂粒やや大。
8	黒褐色粘質土	7.5YR2/2	貼床。褐色（7.5YR4/4）が斑に混じる。
9	黄褐色土	10YR5/6	地山。



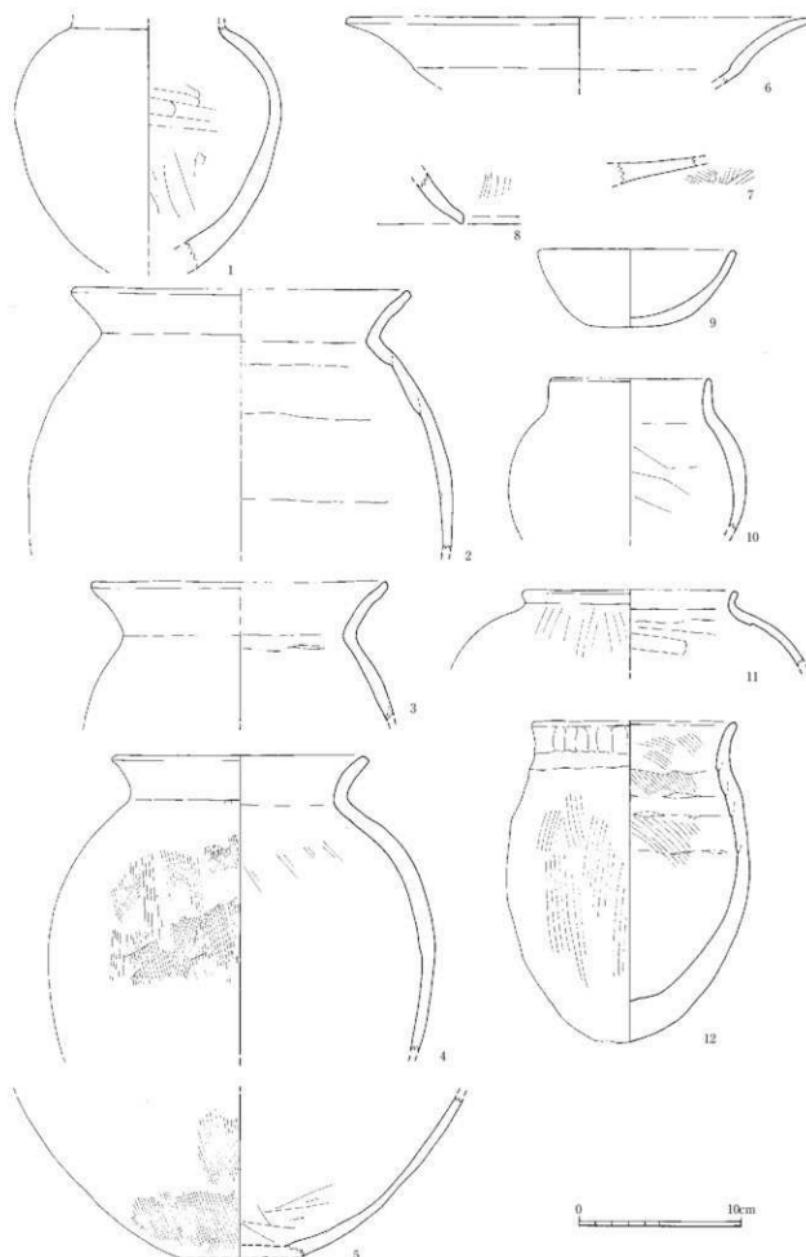
第 27 図 1号竖穴住居跡実測図 (1/60, 1/30)

がみられる。胎土には角閃石を含む。7は高坏の坏部である。調整は外面が放射状のミガキ、内面はナデである。色調は内外面茶褐色を呈す。胎土には雲母・角閃石を含む。8は高坏の脚裾部である。内外面磨滅が著しく、調整は不詳である。色調は内外面灰黄褐色～明赤褐色を呈す。胎土に砂粒が多く混じる。9は小型の鉢である。底部は凸レンズ状気味の平底で、口縁部は内溝気味に立ち上がり、端部は丸い。調整は内外面ナデで、特に口縁部内面は丁寧にナデが施されている。色調は内外面灰黄褐色～淡い焦げ茶色を呈し、外面には焼成時の黒斑がみられる。10・11は短頭壺である。10は口縁部が直に立ち上がり、端部は丸い。調整は内外面ナデである。色調は内外面灰黄褐色を呈し、外面に焼成時の黒斑がみられる。胎土に角閃石・雲母を含む。11は口縁部がやや外反するように短く伸び、端部はやや平坦である。調整は内外面ナデであるが、内面は表面が平滑であるものの頸部には粘土帯の継ぎ目が若干残っている。色調は内外面灰黄茶褐色である。胎土に雲母・赤褐色粒を含む。12は甕である。口縁部はやや外反する程度で端部は丸い。胴部の張りはさほどなく、丸底の底部は厚く作っているため、重量感がある。胴部外面の上位～中位にかけて煤が若干付着する。調整は口縁部外面がナデ、胴部外面は縱方向のハケメ、内面は口縁部にユビオサエがみられ、また口縁部～胴部中位までハケメがあり、以下はナデである。全体的に調整が粗く、頸部外面や胴部内面に粘土帯の継ぎ目が残り、器面に凹凸が多い。色調は内外面橙褐色を呈す。胎土に赤褐色粒・角閃石が混じる。

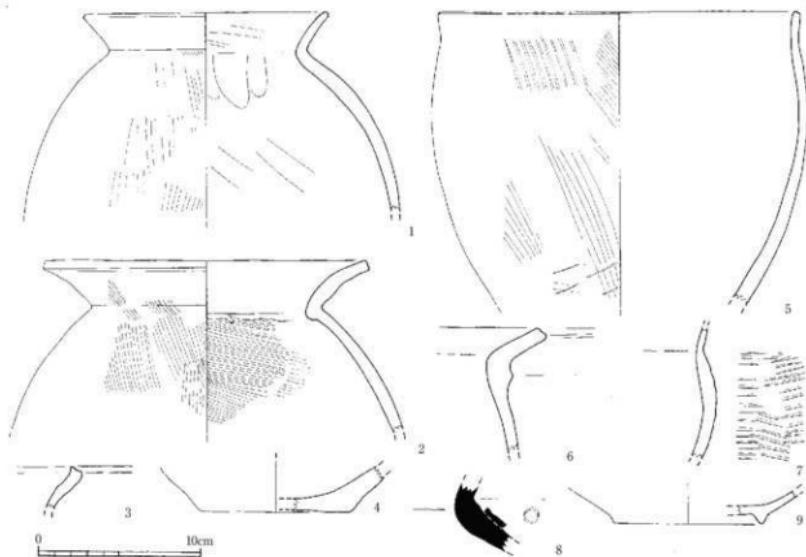
出土土器②(第29図)

1～7は埋土中の遺物であり、甕である。1は口縁部がやや外反し、端部は平坦である。調整は口縁部外面がナデ、内面は横方向ハケメ後ナデ、胴部外面は縱方向ハケメ後ナデ、頸部内面はユビオサエ後ナデ、胴部内面は斜方向の条線後ナデである。色調は外面が茶褐色～灰黃褐色、内面が白黃褐色を呈す。胎土に砂粒が多く含まれ、粒径が5mm大のものもある。2は口縁部がやや強く外反し、端部は平坦である。調整は口縁部外面がナデ、内面が横方向ハケメ後ナデ、胴部外面が縱方向ハケメ、内面が横方向ハケメである。頸部内面には粘土の継ぎ目が残る。色調は内外面灰黄褐色、外面は焼成時の黒斑がみられる。胎土には雲母が若干混じる。3は口縁部片であり、端部は跳上げる。調整は内外面磨滅しており不詳である。色調は内外面灰黄色である。胎土に赤褐色粒を含む。4は平底の底部であるが、若干上げ底気味である。調整は内外面磨滅しており不詳である。色調は内外面暗黄茶褐色を呈す。胎土には雲母・角閃石が混じる。5は口縁部がほぼ屈曲せず、端部は丸い。胴部は張らず、底部に向かってすぼまる。調整は内外面ハケメ後ナデで、全体的に丁寧にナデが施される。色調は内外面暗黄茶褐色～焦げ茶色を呈す。胎土には雲母・角閃石・赤褐色粒を含む。6は口縁部が強く外反し、端部は平坦である。頸部には断面三角形の突帯が廻る。調整は内外面磨滅しており不詳である。色調は内外面赤褐色を呈す。胎土には角閃石を密に含む。7は小型の甕であり、口縁部はほとんど欠損している。調整は外面が横向方向タタキ、内面がナデである。内面には粘土の継ぎ目が残る。色調は内外面灰黄褐色を呈す。胎土には雲母が若干含まれる。

8・9は住居跡内の攪乱から出土した。8は須恵器の甕である。肩部に円形浮文が貼りつけられる。調整は外面がタタキ、内面が回転ナデである。色調は内外面灰色である。9は青磁である。体部～口縁部と見込みの大部分が欠損しており、文様は不詳である。全面施釉し、全体的に貫入があり、疊付のみ露胎する。高台は短く、先端は丸い。疊付内寄りに砂が付着する。色調は断面白色、釉調は緑白色を呈す。



第28図 1号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)



第29図 1号堅穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

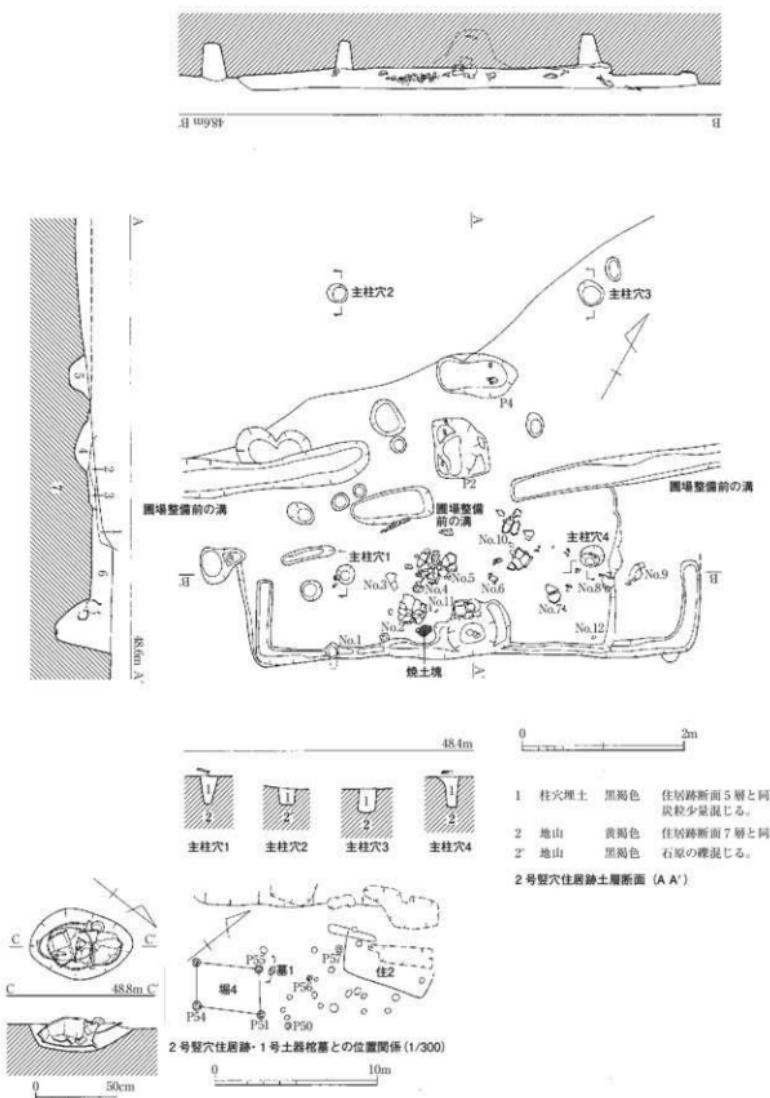
2号堅穴住居跡 (第30図、図版20)

調査区はばば中央に位置し、1号土器棺墓の北側に位置する。北半部は擾乱を受け、主柱穴が残存するのみであり、南側も圃場整備前の水路が重複するなど、残存状態が良いのは南側1/3である。主軸はN-30°Wで、規模は推定一辺540cm、残存する深さは約25cm、平面形は方形である。貼床はない。主柱は4本で、主柱穴は径約20cm、深さは約40cmである。柱痕跡はない。住居内東側には地山ブロック土を含む土で構築されたベッド状遺構があり、床面との比高差は約10cmである。壁際溝は全周せず、東西辺は中央付近に達しない。屋内遺構は住居南壁に接してP1があり、入口に関連する土坑か、貯蔵穴の可能性がある。P2は住居中央に位置し、炭粒や焼土の存在から炉跡と考えられる。P2の北には性格不明のP4がある。住居南辺の壁際溝には斜めに穿たれた小穴2基があり、垂木を固定した穴の可能性があり、住居内には径約10cmの炭化材が散在する。元位置を保つ遺物は床面から若干浮くため、住居廃絶後の埋没過程で投棄されたと考えられる。

出土土器から弥生時代後期の堅穴住居跡であると考えられる。

第6表 2号堅穴住居跡土層断面注記一覧

層番号	土層名	土色	特徴
1	溝埋土	灰色	圃場整備前。新しい。石原の礫混じる。
2	溝埋土	黒褐色	圃場整備前。新しい。1層の粒度に混じる。
3	溝埋土	黄褐色	圃場整備前。新しい。7層に似る。1・2層の粒度に混じる。
4	住居内Pit02埋土	黒褐色	炭粒・焼土粒度に混じる。
5	住居内Pit04埋土	黒褐色	4層に似るが炭粒少なく、焼土粒無し。
6	住居埋土	黒褐色	4・5層に似る。壁際溝。
7	地山	黄褐色	小礫混じる。



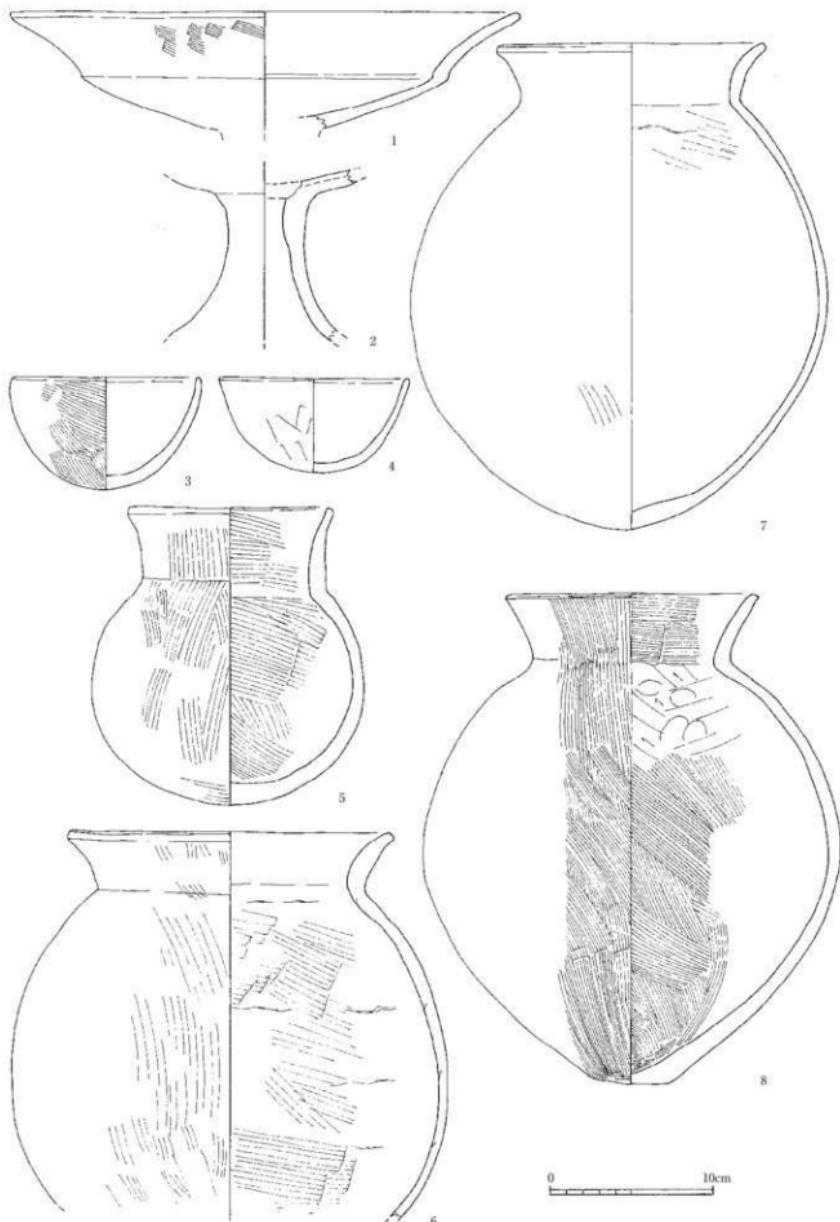
第30図 2号竖穴住居跡・1号土器棺墓実測図 (1/60, 1/30)

出土土器①（第31図、図版25・26）

1は高壺の壺部である。口縁部は受部から外反し、端部は丸い。調整は口縁部外面が斜方向のハケメ、内面・受部外面はナデである。色調は外面が暗黄茶褐色、内面が暗黄茶白褐色～茶褐色を呈す。胎土は精良だが、やや大きめの砂粒が若干含まれる。2は高壺の脚部である。壺部との接合は充填法であり、脚部から裾部にかけては緩やかに開く。調整は全体的に磨滅しており不詳であるが、脚部内面には絞り痕が確認できる。色調は内外面茶白褐色～灰黄褐色を呈す。外面には若干丹塗が残存しており、本来は全体に丹塗が施されていたと考えられる。胎土には雲母を含み、砂粒が密に混じる。3・4は小型の鉢である。3はやや内湾する口縁で、端部は丸い。底部は丸底であるが自立する。調整は外面が横方向ハケメ、内面が丁寧なナデである。色調は内外面灰褐色を呈す。胎土には砂粒を密に含む。4は口縁部が外上方へ伸び、端部は丸い。底部は丸底であるが自立する。調整は口縁部外面がヨコナデ、体部～底部はナデであるが、器面の凹凸が著しく、調整不足である。内面は丁寧なナデである。色調は内外面灰茶褐色を呈し、底部付近に焼成時の黒斑がみられる。胎土は精良で砂粒は少ない。5～8は壺である。5は口縁部が若干外反し、端部は外面をナデすることにより先端が細くなる。胴部から底部にかけては球形を呈し、底部は丸底である。調整は外面が縱方向のハケメ、内面が横方向のハケメであり、口縁部はハケメ後ナデである。色調は外面が黒褐色、内面が茶褐色を呈す。胎土に雲母を若干含む。6は胴部過半以下を欠損する。口縁部は外反し、端部は丸い。胴部最大径付近では煤が若干付着する。調整は外面が縱方向ハケメ後ナデ、内面が横方向ハケメ後ナデである。内面は粘土の継ぎ目が残り、粘土帯の幅は約4cmである。色調は内面が褐色、外面が褐色～焦げ茶色を呈し、外面の頸部付近に焼成時の黒斑がみられる。胎土には雲母が含まれる。7は口縁部が外反し、端部が丸、若干赤色顔料が残る。胴部最大径は胴部中位よりやや下位にあり、底部は丸底である。調整は外面が縱方向ハケメ後ナデ、内面が横方向ハケメ後ナデである。頸部内面には粘土の継ぎ目が残る。色調は内外面褐色を呈し、胴部中位～下位に焼成時の黒斑がみられる。8は口縁部が外反し、端部は平坦である。頸部から胴部は緩やかに膨らみ、胴部中位が最大径となる。底部は平底である。調整は外面が縱方向ハケメで、胴部中位は斜方向ハケメ、口縁部はハケメ後ナデである。内面は底部～胴部までが縱方向あるいは横方向ハケメ、肩部はユビオサエによる凹凸が残り、口縁部は横方向ハケメである。色調は内外面橙褐色～黄橙色を呈し、胴部中位内面と胴部下位外面に焼成時の黒斑がみられる。胎土には砂粒が多く含まれる。

出土土器②（第32図、図版26）

1は長胴の甕である。口縁部の垂みが大きく、平面形は長軸22cm、短軸19.5cmの楕円形を呈す。口縁部は短く外反し、端部は丸い。胴部最大径は口縁部径とほぼ同じで、底部は丸底である。調整は外面が口縁部はハケメ、胴部中位以上は横方向タタキ、胴部下位～底部はタタキ後縱方向ハケメである。内面は口縁部～胴部中位がハケメ、胴部下位～底部はナデである。色調は内外面黄褐色であり、胴部外面には焼成時の黒斑がみられる。胎土は雲母・赤褐色粒を含む。2は埋土中の遺物であり、甕か。口縁部は直線的に外反し、端部は平坦である。頸部の屈曲は大きくないが、内面にはやや稜が付く。調整は外面が縱方向ハケメで頸部から口縁部まで一括で施す。内面は口縁部が横方向ハケメ、頸部は斜方向ハケメ後横方向ハケメである。色調は外面が暗黄茶褐色、内面が茶褐色を呈す。胎土には雲母・角閃石を含む。



第31図 2号竖穴住居跡出土土器実測図① (1/3)

1号土器棺墓（第30図、図版20・21）

調査区中央南寄りに位置し、4号掘立柱建物と2号竪穴住居跡の間に位置する。主軸はN-36°-Wで、墓壙の規模は長軸約65cm、短軸約47cm、残存する深さは約25cmで、平面形は楕円形を呈す。合わせ口の小児棺で、北西側に上壺、南東側に下壺を配し、合わせ目に扁平な円環を咬む。上半分は後世の攪乱により破壊され、下半分のみ残存する。埋土は暗茶褐色～黒褐色土である。位置関係から2号竪穴住居跡に伴う遺構であり、弥生時代後期の土器棺墓と考えられる。

出土土器（第32図、図版26）

3は上壺である。口縁部は跳上口縁であり、胴部最大径は口縁部径より小さい。調整は口縁部が内外面ヨコナデ、胴部は外面ナデで、内面は特に丁寧なナデである。色調は外面白黄褐色を呈す。胎土には角閃石・雲母・赤褐色粒が含まれる。4は下壺の口縁部～胴部である。口縁部はやや跳上気味で、胴部最大径は口縁部径とほぼ同じである。調整は口縁部がヨコナデ、胴部は内外面ナデである。色調は外面が暗黄茶褐色、内面が黄橙色を呈す。胎土には砂粒が多く、雲母・赤褐色粒を含む。5は下壺の底部である。底部は平底である。調整は外面ナデ、内面は磨滅しており不詳である。色調は外面が淡橙褐色、内面が焦げ茶色を呈す。胎土は4と同様である。

掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（第33図、図版21）

調査区東端に位置する。梁行2間・桁行3間の側柱建物跡である。主軸はN-38°-Eで、規模は桁行総長472cm、梁行総長384cmである。柱間寸法は桁間約150cm、梁間約190cmである。柱穴の規模は径40cm、深さ80cmである。柱痕跡はなく、埋土は焼土混じりの黒褐色土である。出土遺物はなく、時期は不明である。

2号掘立柱建物跡（第33図、図版21）

調査区東側の1号竪穴住居跡と3号掘立柱建物跡の中間に位置する。北東の柱穴は検出できなかつたが、梁行1間・桁行2間の側柱建物跡である。主軸はN-52°-Wで、規模は桁行総長340cm、梁行総長216cmである。柱間寸法は桁間約180cm、梁間約210cmである。柱穴の規模は径約40cm、深さ約48cmである。柱痕跡はなく、埋土は黒褐色土である。

出土遺物はなく、時期は不明である。

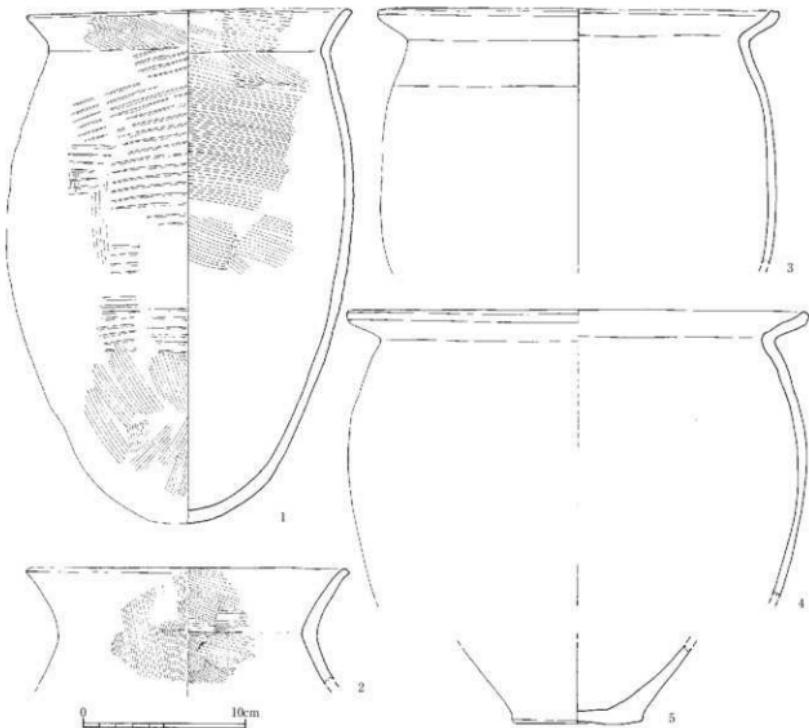
3号掘立柱建物跡（第34図、図版22）

調査区東側に位置する。1・2号掘立柱建物跡の間に位置する。桁行2間・梁行2間の側柱建物跡である。個々の柱穴は2基ずつ重複しており、建替えが認められる。主軸はN-35°-Eで、規模は桁行総長400cm、梁行総長292cmである。柱間寸法は桁間約230cm、梁間約200cmである。柱穴の規模は径約50cm、深さ約80cmである。柱痕跡はなく、埋土は黒褐色土である。

出土遺物に弥生土器が含まれるが、該期の遺構とは特徴が異なる。中世か。

出土土器（第36図、図版26）

1～3はP7最下層から出土した。1・2は壺あるいは壺の底部である。1は外側に張出す平底で、板圧痕が残る。調整は外面ナデである。色調は外面が橙褐色、内面が暗灰色を呈す。胎土



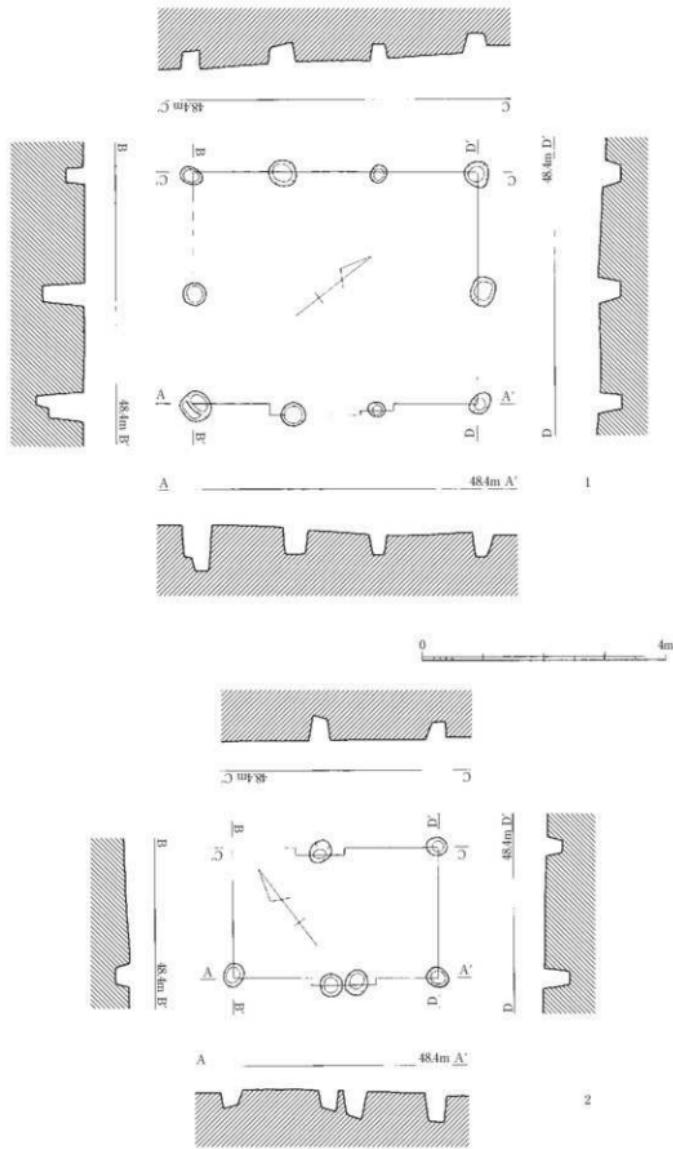
第32図 2号竪穴住居跡出土土器実測図②・1号土器棺出土土器実測図(1/3)

には砂粒を密に含む。2はやや張出す平底である。内面は剥離しており不詳である。調整は外面がナデである。色調は外面が橙褐色～灰黄褐色を呈す。胎土には砂粒を密に含む。3は器種不明、口縁部か、端部は平坦である。円弧が緩く、径は大きい。内外面丹塗が残る。調整は内外面ヨコナデである。色調は赤茶色～灰黄色を呈す。胎土に砂粒が少ない。

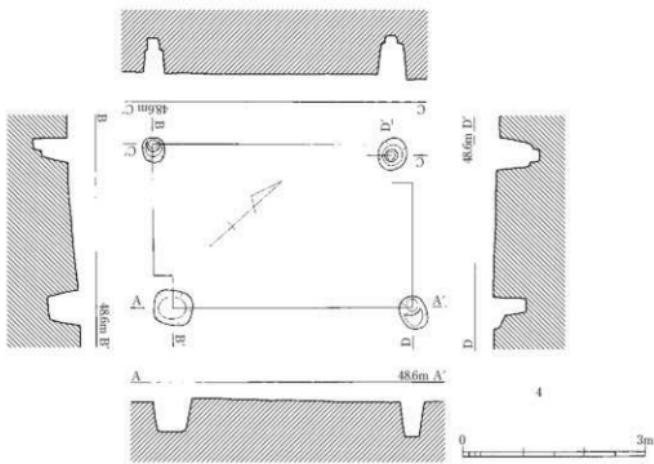
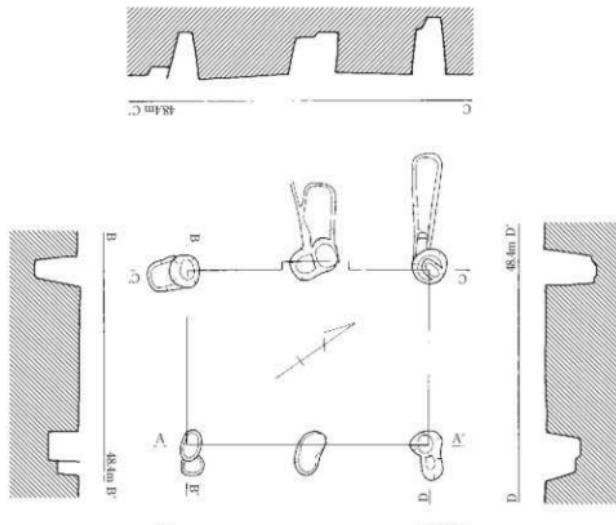
4号掘立柱建物跡（第34図、図版22）

調査区中央南側に位置し、1号土器棺墓に近接する。桁行1間・梁行1間の個柱建物跡である。主軸はN-48°-Eで、規模は桁行総長400cm、梁行総長270cm、柱間寸法も同値である。柱穴規模は径約50cm、深さ約80cmで、柱痕跡はなく、埋土は黒褐色土である。

出土遺物はなく、時期は不明である。



第33図 1・2号掘立柱建物跡実測図 (1/80)



第34図 3・4号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

土坑墓・土坑・溝

1号土坑墓（第35図、図版22・23）

調査区東側に位置し、2号掘立柱建物と1号竪穴住居跡の間に位置する。主軸はN-33°-Wで、規模は長軸164cm、短軸84cm、平面形は長方形を呈す。墓壙中央の床から約15cm上位に30cm大の扁平な石3個が水平に並ぶ。北西隅付近では、石の下位の埋土中から土師器椀が2点出土した。埋土はにぶい黄褐色土である。

出土土器から平安時代後期（11世紀代頃か）の土坑墓と考えられる。

出土土器（第36図）

4・5は土師器椀である。4・5ともに体部が丸味をもち、口縁端部は丸い。底部は糸切痕が確認できる。4は高台は短くやや外向きで、5は外側に張出す。調整は磨滅のため不鮮明であるが、ナデであろう。色調は内外面白黄茶色を呈す。胎土には赤褐色粒を多量に含む。

1号土坑（第35図、図版23）

調査区西端に位置する。主軸はN-56°-Wで、規模は長軸284cm、短軸140cmの不成形土坑である。削平を受けており、堆積が薄いが、最下層から黒色土器壺が出土した。

出土土器から9世紀代以降に埋没した土坑であると判断できるが、性格は不明である。

出土土器（第36図）

6は黒色土器（内黒）椀である。体部は開き口縁端部は丸い。高台はやや長く、外側に張出す。調整は外面がヨコナデ、内面がミガキである。色調は外面が灰褐色、内面が黒色を呈す。胎土には雲母・角閃石を含む。

2号土坑（第35図、図版24）

調査区西端に位置し、1号溝状遺構と重複し、後出する。拳大～人頭大の砾が中央に集中するが、人為的な配置は認められず、土とともに堆積したと考えられる。

出土土器から時期は判断し難く、性格も不明である。

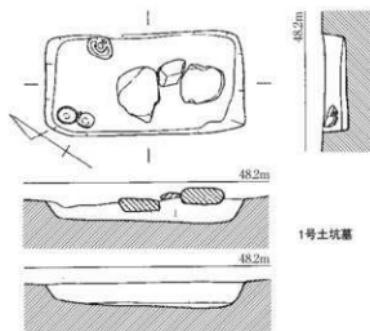
出土土器（第36図7・8）

7は平底の底部である。調整は内外面磨滅のため不詳である。色調は外面が淡橙褐色、内面が灰黄色を呈す。胎土に角閃石、雲母を含む。8は土師器の高台付底部である。調整は高台部分はナデ、その他は磨滅のため不詳である。色調は内外面淡橙褐色を呈す。胎土に雲母を含む。

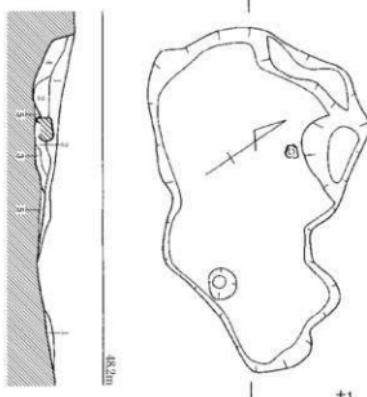
1号溝（第35図、図版24）

調査区西端に位置し、1号土坑と重複し、先行する。約6m分検出したが、両端は調査区外に伸びる。主軸はN-32°-Eで、規模は幅約50cm、深さ約30cmである。

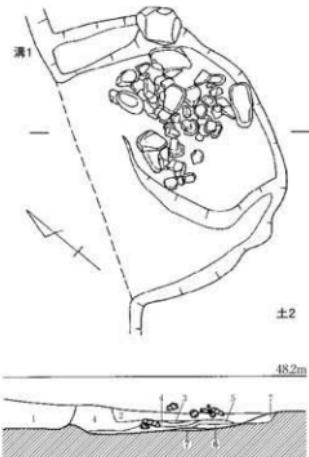
圃場整備前の水田の用水路の可能性がある。



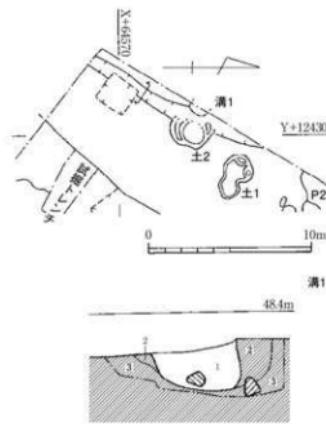
1 にぶい黄褐色粘質土 10YR4/2
粘性やや強。きめ細かい。
黒褐色(10YR3/2)が混じる。
擬固した部分(黒色)が 少量混じる。



1 黒褐色粘質土 床土下位。須恵器包含。
粘性弱。1層よりやや茶色味が強い。
2 黒褐色粘質土 明褐色粘質土が混じる。1・2層より粘性強。
3 黒褐色粘質土 3層に似る。粘性弱。
4 褐色粘質土 この層の下位で黑色土器杯が出土。
5 黄褐色粘質土 地山。拳大～人頭大の礫多し。



1 1号溝埋土
2 黒褐色粘質土 7.5YR3/1 拳大の礫多し。
平面図の礫はこの層中。
3 暗褐色粘質土 7.5YR3/3 粘性弱。砂粒多し。
褐色粘質土混じる。
4 黑褐色土 7.5YR2/2 粘性弱。2層よりやや明るい。
砂粒多し。1～5cmの礫あり。
5 黑褐色粘質土 7.5YR3/1 灰褐色(7.5YR4/2)が
マーブル状に混じる。礫少ない。
6 褐色粘質土 10YR4/4 粘性弱。黒褐色土が斑に混じる。
7 にぶい黄褐色 10YR4/3 地山。やや灰色味を帯びる。
砂礫 1cm以下の礫多い。硬い。



1 暗褐色粘質土 10YR3/3 粘性強。
1～2.5cmの礫少量。
2 褐色粘質土 10YR4/6 粘性強。地山。
3 灰黃褐色砂礫 10YR4/2 地山。1cm以下の礫多い。
大きいものは3cm程度。
褐色砂礫が部分的に混入。

0 2m

第35図 1号土坑墓、1・2号土坑、1号溝実測図 (1/40, 1/300)

その他の遺構出土土器・遺構外出土土器（第36図）

ピット出土土器（9:P14、10:P15、11・12:P1、13:P2、14:P41）

9・10は弥生時代中期の土器である。9は上面は平坦で鋸形口縁であり、外面は口縁部の下位に段を設ける。調整は内外面ナデである。内外面に丹塗りを施し、色調は内外面赤茶色～灰黄褐色を呈す。胎土に角閃石・雲母を含む。10は胴部で外面に2条の突帯をめぐらす。調整は内外面ナデである。外面に丹塗りを施し、色調は外面が赤褐色、内面が灰黄色を呈す。胎土に角閃石・雲母を含む。11は土師器皿か壺である。平安時代後期か。口縁部はやや内湾し、端部は細く丸い。調整は内外面ナデである。色調は内外面白黄茶色を呈す。胎土は精良で砂粒等はほとんど含まない。12は須恵器壺か。口縁端部は上方へ摘み上がり、頸部は強く湾曲する。調整は内外面回転ナデである。色調は内外面灰黄色を呈す。13・14は弥生時代後期の土器の壺である。口縁部は外反し、端部は平坦でやや跳ね上げる。調整は13・14ともに胴部外面がハケメ後ナデ、他はナデである。色調は13が灰黄色、14が灰黄褐色を呈す。ともに胎土には雲母を含み、14には角閃石も含む。

表土出土土器（15～18）

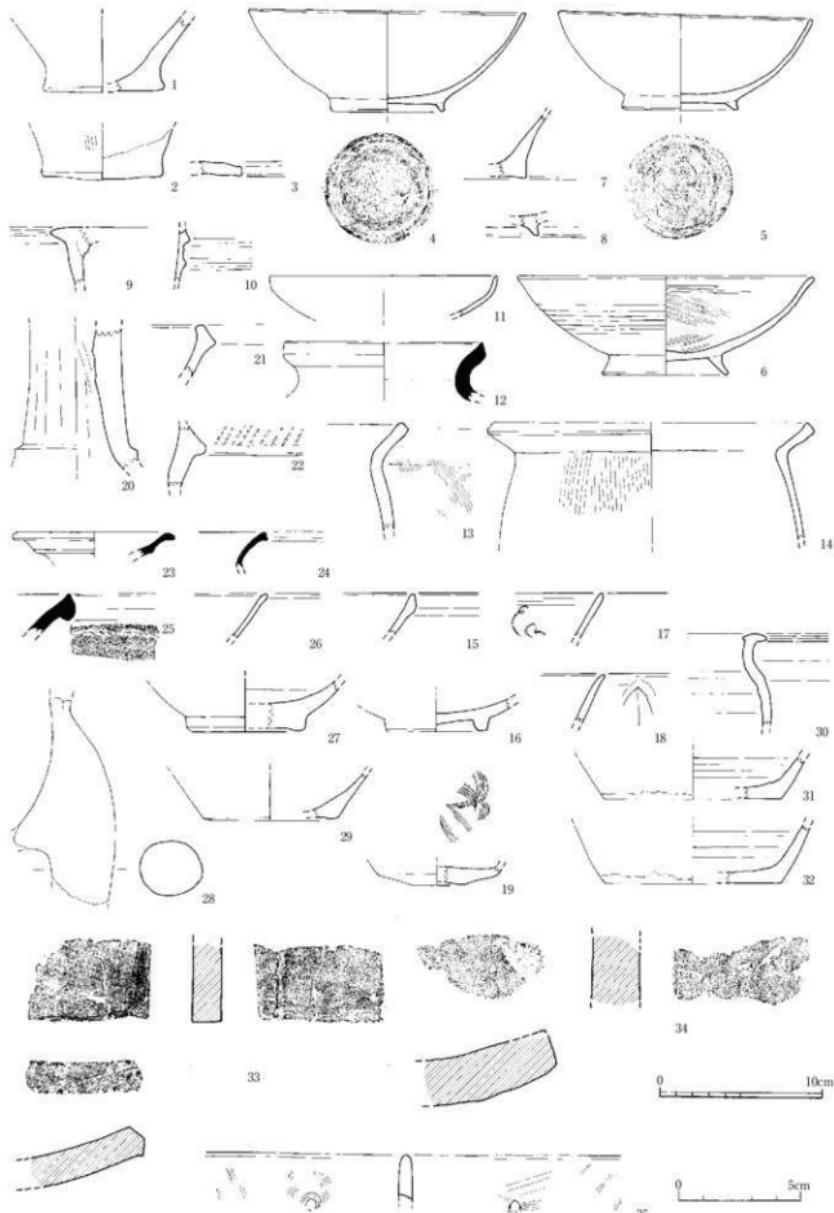
15・16は白磁である。15は玉縁をもつ口縁である。釉調は灰黄色を呈す。12世紀前半頃か。16は底部である。高台は厚く、高台部分は露胎する。17・18は龍泉窯系青磁である。17は楕の口縁部である。口縁部内面に片彫りによる2条の沈線をめぐらし、その下に草花文を描く。釉調は黄緑色を呈す。時期は12世紀後半である。18は外面に蓮弁を有し、中心に不明瞭ながら稜をもつ。釉調は青緑色を呈す。時期は13世紀代か。

検出時出土土器（19）

19は龍泉窯系青磁の皿である。底部は碁笥底で、見込みの文様は櫛描きである。釉調は黄緑色を呈す。時期は12世紀後半である。

遺構外出土土器（20～32）

20～22は弥生時代中期～後期の土器か。20は高坏脚部である。裾部との境に段を有する。調整は外面が縱方向工具ナデで棱をもち、内面には絞り痕がある。外面には丹塗りが施され、色調は外面が赤褐色、内面が黒灰色を呈する。胎土には雲母・角閃石を含む。21は器種不明の口縁部であり、端部は平坦である。口縁部外面に断面三角形の突帯をめぐらす。調整は内外面ナデ、口縁部内面から外面にかけて丹塗りが残り、色調は外面が茶褐色、内面が灰黄褐色を呈す。胎土に雲母を含む。22は壺口縁部であり、瀬戸内系である。口縁部外面に貝殻刺突文をめぐらす。調整は内外面ナデ、文様帶には丹塗りが残り、色調は内外面灰黄褐色を呈す。23～25は須恵器である。23・24は8世紀代の壺か。23は口縁部の屈曲部外面には粘土を追加し、稜をつくる。端部は大きく外反し、先端は丸い。調整は内外面回転ナデである。色調は暗灰色を呈す。24は口縁は強く外反し、端部は平坦で、やや下方に伸びる。調整は内外面回転ナデである。色調は内外面灰色である。25は壺か。口縁部は玉縁状を呈し、外面には波状文を施す。調整は内外面回転ナデである。色調は外面が暗灰色、内面が暗灰色を呈す。26は黒色土器（内黒）楕である。口縁端部はやや外反し、先端は丸い。調整は外面がナデ、内面がミガキである。色調は外面が灰黄色、内面が黒色を呈す。



第36図 3号掘立柱建物跡、1号土坑墓、1・2号土坑、その他の遺構、
遺構外出土器、瓦（1/3）・石器実測図（1/2）

時期は10～11世紀代か。27は白磁椀の底部である。高台の割りは浅く、底部が厚い。見込みには体部との境に沈線が廻る。外面は露胎する。釉調は灰白色を呈す。時期は11世紀後半～12世紀前半頃か。28は足鍋の脚部である。調整は内面ナデ、外面は粗いナデである。色調は灰黄褐色、脚部内面は被熱により赤褐色を呈す。胎土に角閃石・黒曜石（姫島産ではない）が含まれる。29は陶器の底部である。高台の割りは浅く、豊付はやや広い。高台分と外面底部付近は露胎する。釉調は黄茶色を呈す。時期は近世以降か。30～32は小石原焼か。30・31は同一個体の甕である。30は口縁部である。端部は外面に大きく、内面に少し張り出す。口縁部以外の内外面に施釉するが焼成不良で発色が悪くザラつく。31は底部である。底部は露胎する。30・31ともに胎土は淡褐色、釉調は灰黄色を呈す。32は甕底部であり、外面に施釉する。胎土は赤褐色、釉調は灰黄色を呈す。

瓦（33・34）

遺構外から出土した平瓦である。33は側縁と端面を含む破片である。側縁は二面に面取りされる。四面凸面ともに丁寧にナデが施され、タタキ等の痕跡は不詳である。色調は内外面かおい黄褐色を呈す。胎土は精良で、砂粒は少ない。34は側縁を含む破片である。側縁はケズリにより面取りされる。四面凸面ともナデが施されるが、器面の凹凸が残る。また、タタキ等の痕跡はナデにより不詳である。色調は内外面灰色を呈す。胎土にやや大きめの砂粒が少量含まれる。

四面凸面の状況が不詳ながら古代の瓦と考えられる。

石器（35）

35は2号土坑から出土した粘板岩製石包丁である。残存長6.8cm、残存幅2.5cm、厚さ0.5cm、刃部は欠損する。孔は1つ残存しており、一方方向からの穿孔であり、外径0.8cm、内径0.5cmを測る。背は丸く、全体は平滑に研磨されている。この他、姫島産黒曜石の碎片が数点出土した。

4 まとめ

縄文時代は後期～晩期の土器を確認した。当遺跡周辺では佐井川の上流に後期の狭間宮ノ下遺跡が、晩期の河原田塔田遺跡がある。弥生時代中期は丹塗土器の出土が特徴的である。なお、当遺跡の南側には前期末～中期後半の集落遺跡で青銅器が出土した鬼木四反田遺跡がある。弥生時代後期は堅穴住居跡2棟・土器棺墓1基が確認された。小規模集落なのか、集落の周縁部であるのか不明だが、遺跡が立地する平野部の集落分布の一端を窺うことができよう。なお、佐井川下流域には大規模集落である小石原泉遺跡がある。古墳時代は遺構もなく、遺物も少量である。当遺跡から約800m北方の岩岳川の右岸にはオンドル状遺構をもつ集落が展開する。掘立柱建物跡については、第1次調査で検出された奈良時代以降の掘立柱建物跡と規模や主軸の方向、柱穴の形状が似ることから、同時期の可能性がある。奈良時代は他に須恵器や瓦が少量出土した。佐井川上流域に由来となる官衛あるいは寺院跡があるのであろうか。平安時代の9世紀代は性格不明の土坑から黒色土器が出土した。1号土坑墓は副葬品から11世紀代と考えられる。平安時代後期の12世紀代は青磁・白磁が出土し、足鍋の脚部が出土したことから中世の遺物も存在する。近世には小石原焼の可能性がある陶器が出土しており、幅広い時期の遺構と遺物が出土した。

今回の調査では遺構密度は稀薄であったが、当遺跡周辺の扇状地における遺跡分布の在り方や、弥生時代後期の集落の展開、古代の集落遺跡の様相を窺う資料が得られた。また、遺構外出土遺物は遺跡周辺に由来が求められるため、未知の遺跡の存在にも注意を払う必要がある。

図 版



1. 鳥越下屋敷遺跡遠景
(空中写真 南から)



2. 鳥越下屋敷遺跡全景
(空中写真 西から)



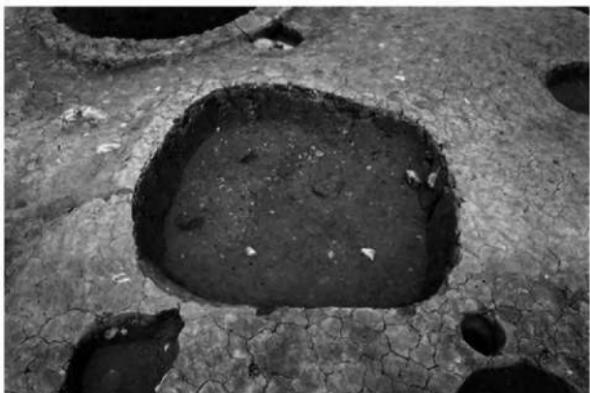
1. 1～3号土坑（北から）



2. 1号土坑（西から）



3. 1号土坑土層（西から）



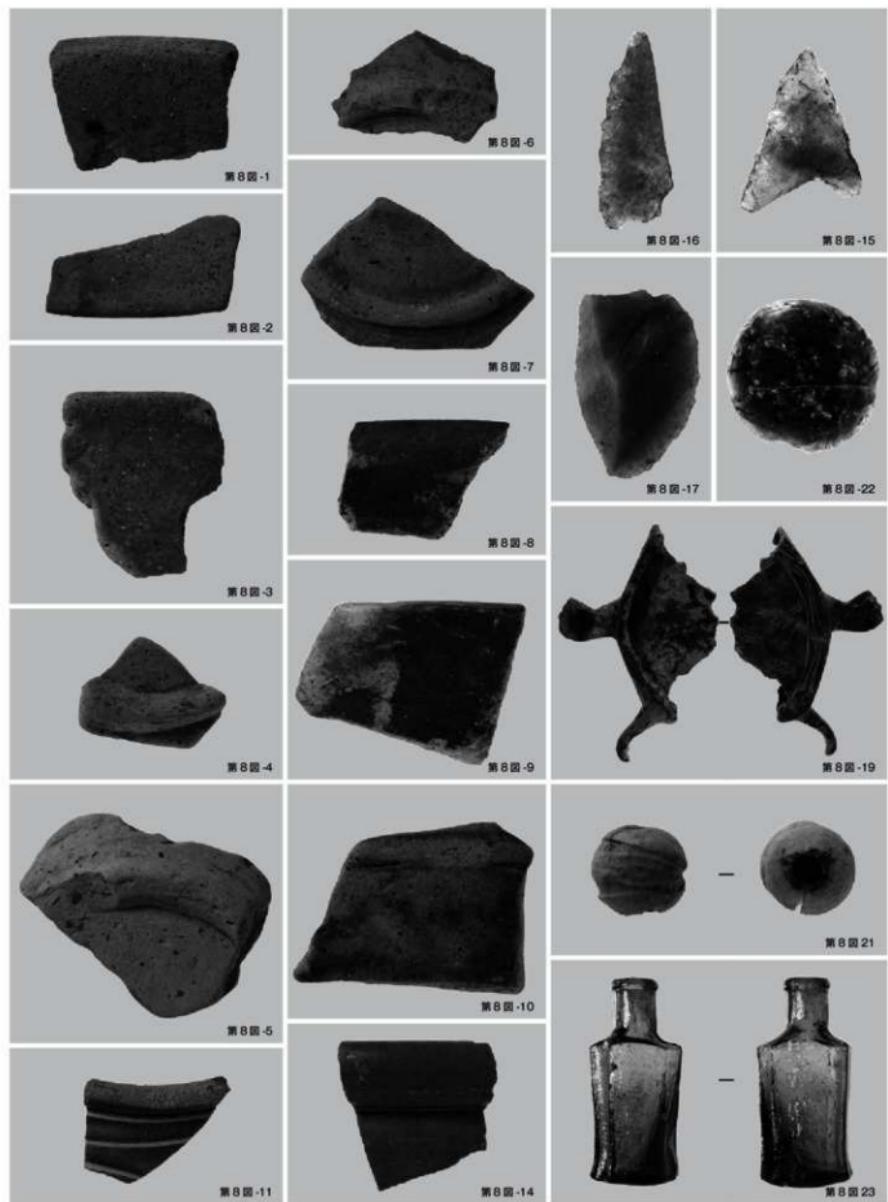
1, 3号土坑（東から）



2, 4号土坑（東から）



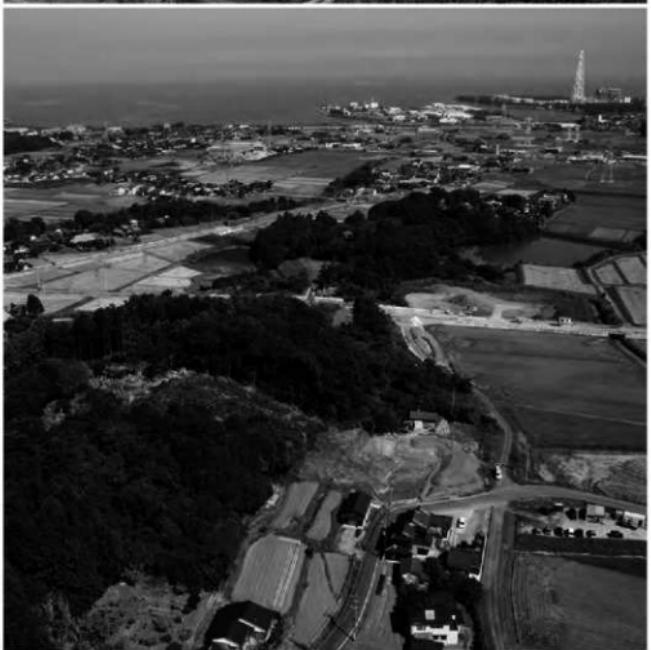
3, 1 ~ 4号溝（北から）



鳥越下屋敷遺跡出土遺物



1. 大村湯福遺跡遠景
(空中写真 北から)



2. 宝山小出遺跡遠景
(空中写真 南から)



1. 西半部全景
(空中写真 東から)



2. 西半部全景 (空中写真)



3. 東半部全景
(空中写真 東から)



1. 東半部全景（空中写真）



2. 1号土坑（検出状況 東から）



3. 1号土坑（掘削状況 東から）



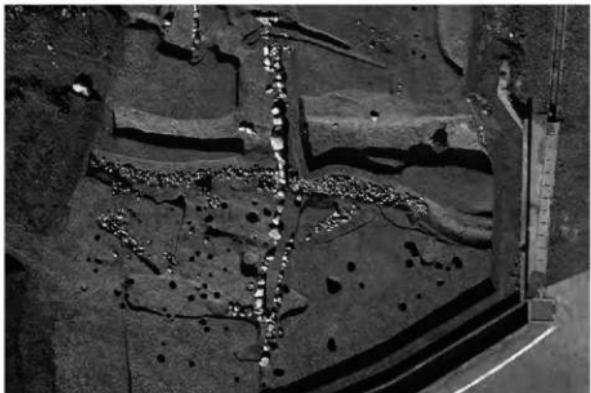
1. 2号土坑（検出状況 南から）



2. 2号土坑（掘削状況 西から）



3. 3号土坑（南から）



1. 1～3号溝（空中写真）



2. 1号溝（南から）



3. 3号溝（東から）

图版 10



第12図-1



第12図-3



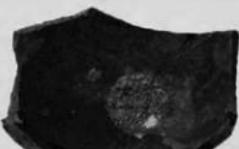
第12図-6



第14図-4



第14図-5



第14図-10



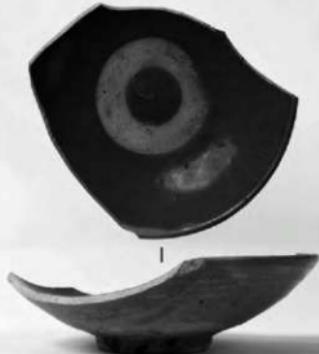
第14図-11



第14図-13



第14図-15



第14図-9



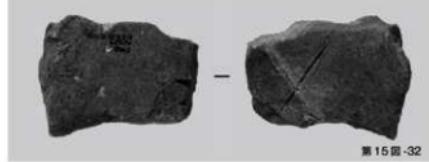
第14図-17



第14図-24



第15図-31



第15図-32



第16図-1



第16図-2



第16図-3



第16図-4



第16図-5



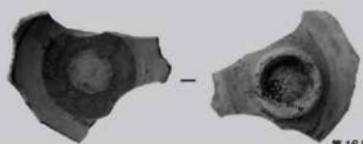
第16図-6



第16図-7



第16図-8



第16図-11



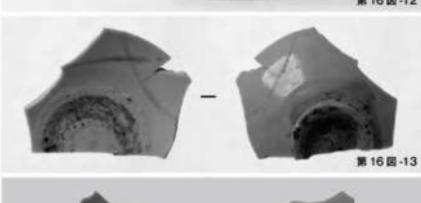
第16図-9



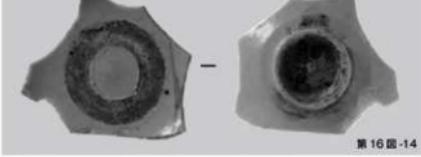
第16図-10



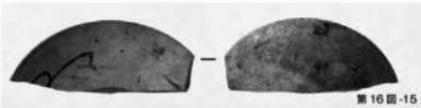
第16図-24



第16図-13



第16図-14



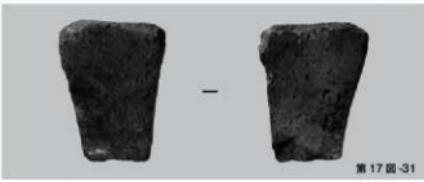
第16図-15



第16図-16



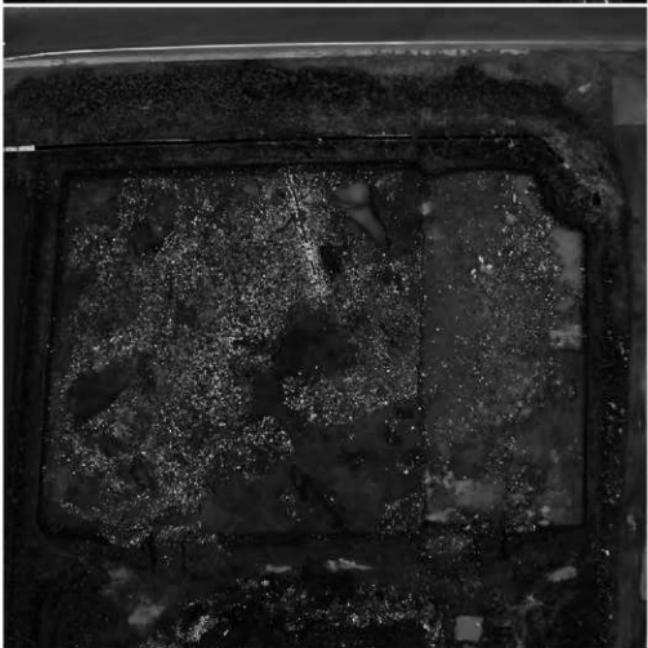
第17図-30



第17図-31



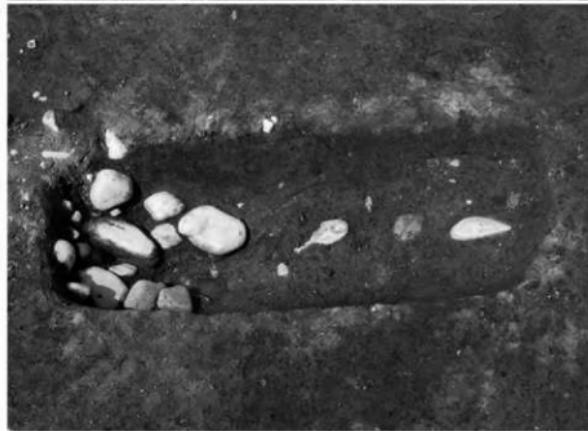
1. 鬼木鉾立遺跡 2次
調査区遠景
(空中写真 北東から)



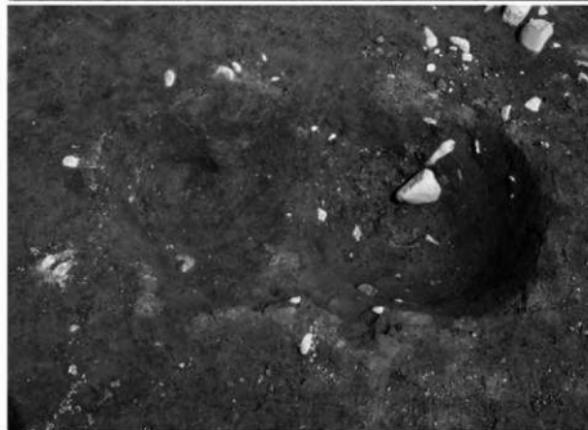
2. 鬼木鉾立遺跡 2次
調査区全景
(空中写真)



1. 1号土坑（北東から）



2. 2号土坑（南西から）



3. 3号土坑（北西から）



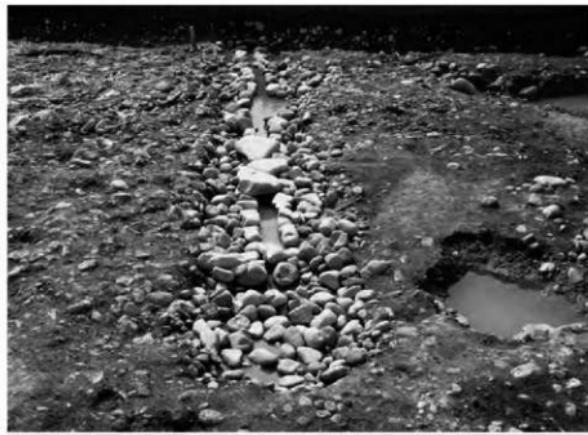
1, 4号土坑（北西から）



2, 5号土坑（西から）



3, 6・7号土坑（東から）



1. 1号溝（東から）



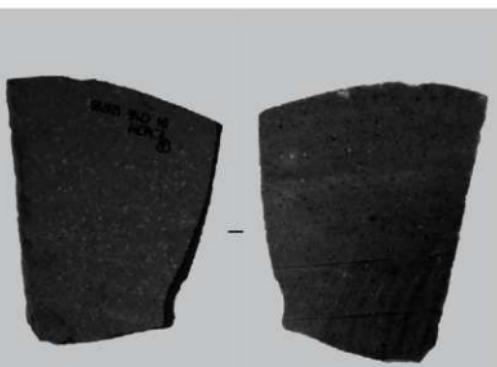
2. 1号溝（東から）



第22図-1



第22図-3



第22図-2

3. 鬼木鉢立遺跡 2次調査出土遺物



1. 鬼木鉢立遺跡 3 次調査区
西半部全景
(右下が北)



2. 鬼木鉢立遺跡 3 次調査区
東半部南側全景
(左上が北)



3. 鬼木鉢立遺跡 3 次調査区
遠景
(東から)



1. 鬼木鉢立遺跡 3 次調査区
遠景（東から）



2. 1号トレンチ土層断面
(北から)



3. 2号トレンチ土層断面
(北東から)



1. 3号トレンチ土層断面
(南から)



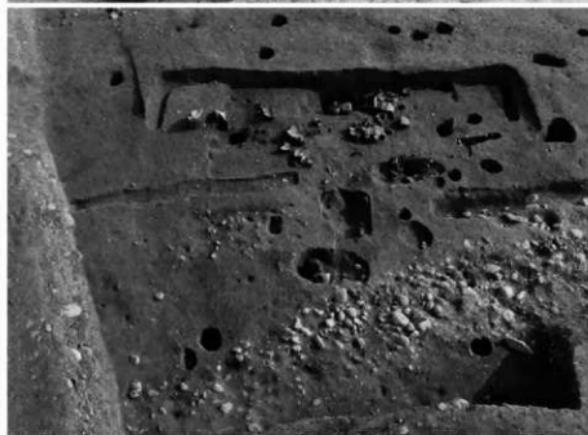
2. 1号竪穴住居跡
南北土層断面
南側 (東から)



3. 1号竪穴住居跡完掘状況
(西から)



1. 2号竪穴住居跡
土層断面（南から）



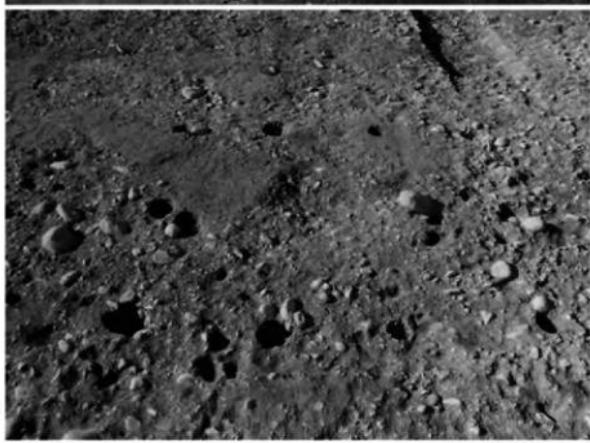
2. 2号竪穴住居跡検出状況
(北西から)



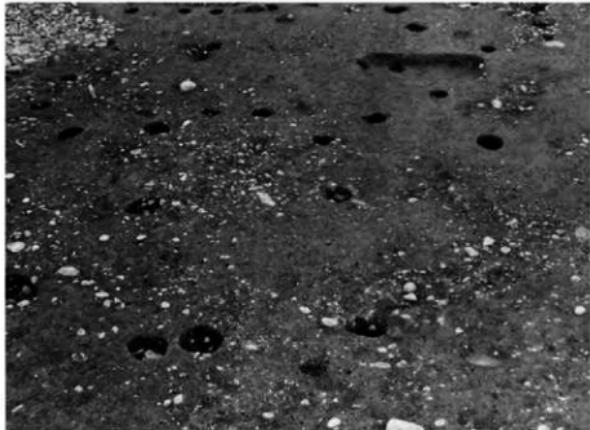
3. 1号土器棺墓
(西から)



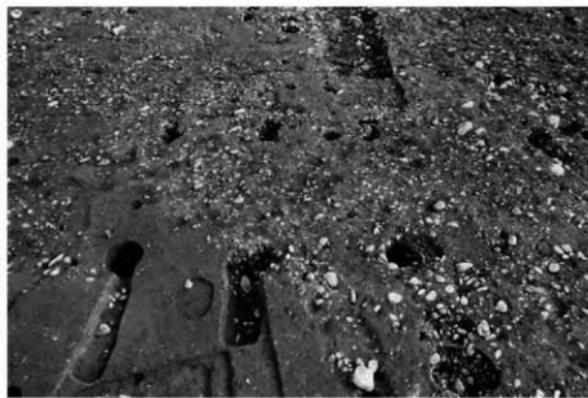
1. 2号堅穴住居跡と
1号土器植窯
(西から)



2. 1号掘立柱建物跡
(東から)



3. 2号掘立柱建物跡
(南から)



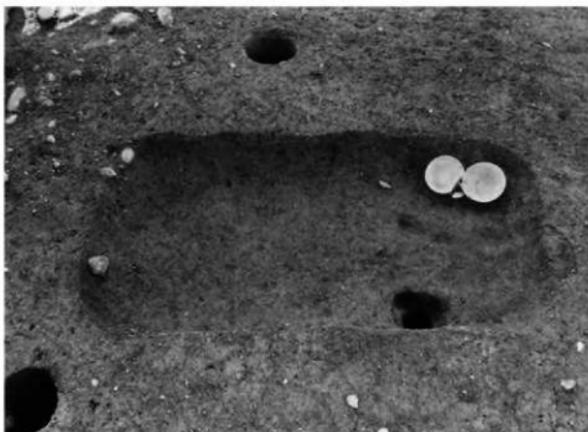
1. 3号掘立柱建物跡
(西から)



2. 4号掘立柱建物跡
(上が北西)



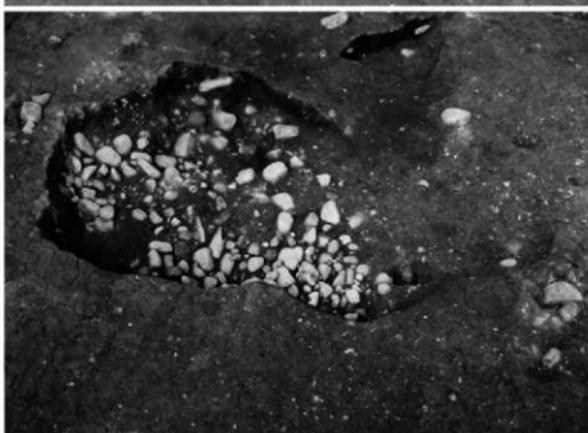
3. 1号土坑墓土層断面
(南から)



1. 1号土坑墓遺物出土状況
(北から)



2. 1号土坑土層断面
(南から)



3. 1号土坑完掘状況
(南から)



1. 2号土坑検出状況
(南から)



2. 2号土坑・1号溝
土層断面 (南から)



3. 調査区周辺地形
(北東から)



第28図-12



第31図-5

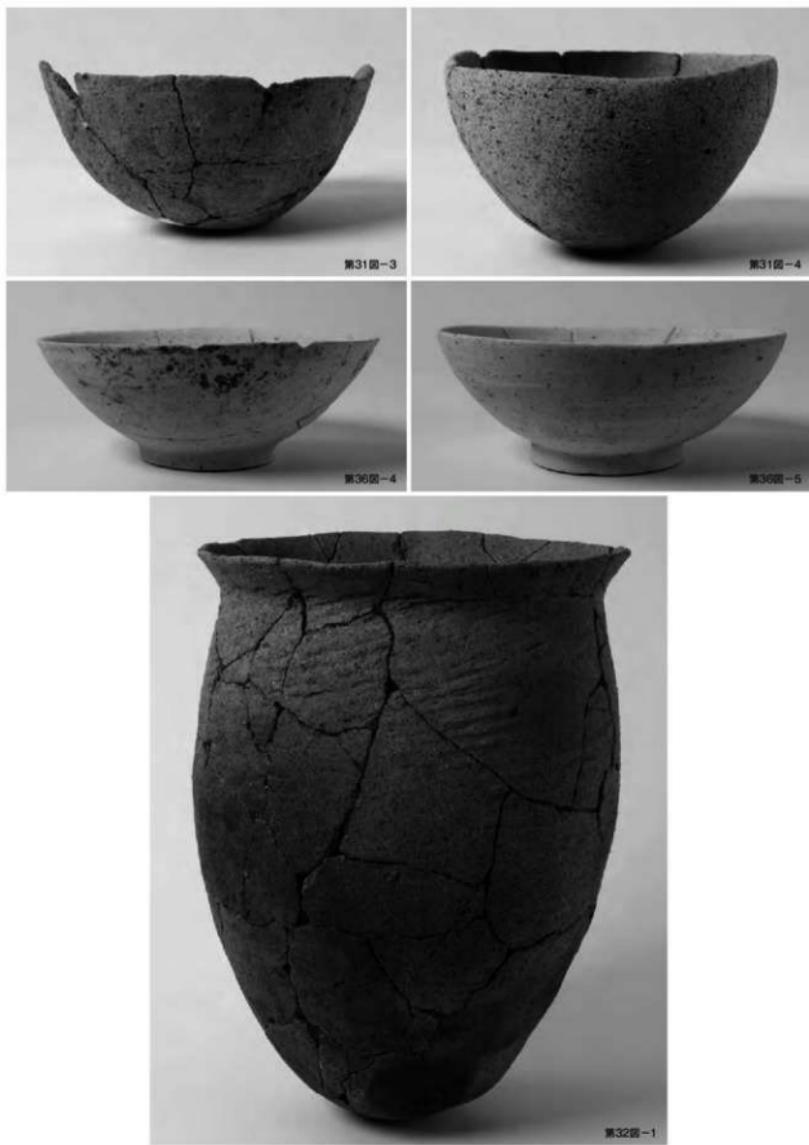


第31図-6



第31図-7

鬼木鉢立遺跡 3次調査出土土器①



鬼木鉢立遺跡 3 次調査出土土器③

報告書抄録

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 26	登録番号 16

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告

-21-

福岡県豊前市所在遺跡の調査

鳥越下屋敷遺跡・大村湯福遺跡・鬼木鉢立遺跡

平成 27 年 3 月 31 日

発行 九州歴史資料館

〒 838-0106 福岡県小郡市三沢 5208- 3

印刷 石橋印刷株式会社

〒 812-0007 福岡市博多区東比恵 3 -21-10